

ハンガリー語における Wh 島事象について

石 岡 精 三*

WH-Island Phenomena in Hungarian

Seizo ISHIOKA*

Key words : Phrase Balance, Specific Wh-Phrase, Wh-Island Constraint

0. はじめに⁰⁾

Chomsky (2000, 2001) が提唱するフェイズ不可侵性条件 (Phase Impenetrability Condition, PIC) は, Wh 島制約に抵触する (1) から (3) の英語の用例すべてを不適格と予測する。本稿の第 1 節において述べるように, PIC は Wh 要素が Wh 島内部から移動する派生を生成不能とする効果をもつ。しかしながら, PIC が排除する (2a) と (3a) と (3c-d) を基本的に適格と判断する話者グループが存在する。同様に, PIC は Wh 島制約に抵触する (4) と (5) のスペイン語の用例すべてを不適格と予測する。しかしながら, (4a) と (5a) のスペイン語の用例は, ある一定の条件下で Wh 要素が Wh 島内部から移動可能であることを示している。適格と判断される (4a) においては, 主語 Wh 要素 (*quién 'who'*) が直接目的語 Wh 要素 (*qué película 'what movie'*) の移動によって形成される Wh 島内部から移動している。

- (1) a.*Whati did you wonder who had borrowed ti?
b.*Whoj did you wonder whati tj had borrowed ti?
- (2) a.(?) [Which books]i did John wonder [which students] had borrowed ti? (Freidin 1995: (22))
b.* [Which students]j did John wonder [which books]i tj had borrowed ti? (Freidin 1995: (25))
c.* [Which students]j did John wonder tj had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5))
d.* [Which books]i did she say who read ti? (Freidin 1992: p.94, (36b))
- (3) a.(?) [Which book]i do you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000: (19))
b.?*Whati did you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000: (18))
c. [What products]i do they wonder [which age-groups] will buy ti? (É. Kiss 1993: p.93, (21))

原稿受付：平成18年5月22日

*長岡技術科学大学語学センター

- d. [Which students]i do you know who invited ti? (É. Kiss 1993 : p.89)
- (4) a.₆ Quién no sabes [qué película]j dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (68))
 ‘Who do you know what movie directed in '51'?’
- b.*₆ [Qué película]j no recuerdas quién dirigió ti tj en el cincuenta y uno? (Torrego 1984 : (69))
 ‘What movie don't you remember who directed in '51'?’
- (5) a.₆ [A quién]i dices que no te acuerdas quéj lei has dicho tj ti? (Torrego 1984 : (54a))
 ‘To whom do you say that you don't remember what you have said?’
- b.*₆ Quéj dices que no te acuerdas [a quién]i lei has dicho tj ti? (Torrego 1984 : (54b))
 ‘What do you say that you don't remember to whom you have said?’

同じく適格と判断されるスペイン語の用例 (5a) でも、間接目的語 Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が直接目的語 Wh 要素 (*qué* 'what') によって構成される Wh 島内部から移動している。

本稿の主たる対象となるハンガリー語では、スペイン語と異なる状況が観察される。以下の用例からも判明するように、当該言語においては、項 (Argument) Wh 要素が Wh 島内部から移動可能である (項 Wh 要素の生成位置 (始発点) に関係なく)。並行するスペイン語の用例 (5b) とハンガリー語の用例 (6b) との相違が興味深い ((5b) が不適格と判断される)。(6a) と (6b) のそれぞれにおいて、項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom', *mit* 'what') が Wh 島内部から移動可能である。(7a) でも同様に、項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom') が長距離移動している。その一方で、(7b) における付加語 (Adjunct) Wh 要素 (*hogyan* 'how') の長距離移動は排除される ([] 内にある Wh 要素の相対的な位置関係は問われない)。(7e) のハンガリー語の用例が示すように、複数の項 Wh 要素が Wh 島内部から脱出することはない。

- (6) a. Mari **kinek** tudta hogy Péter **mitj** küldött [ti tj]? (Richards 1996 : (15))
 Mary-NOM who-DAT know-PAST-3SG that Peter what-ACC send-PAST-3SG
 ‘To whom did Mary know what Peter had sent?’
- b. Mari **mitj** tudta hogy Péter **kinek** küldött [ti tj]?
 ‘What did Mary know to whom Peter had sent?’
- (7) a. **Kinek** nem tudod hogy **hogyanj** **mitk** mondott [ti tk tj]? (Puskás 2000 : p.265, (89a))
 who-DAT NEG know-PRES-2SG that how what-ACC say-PAST-3SG
 ‘To whom don't you know how he said what?’
- b.***Hogyanj** nem tudod hogy **kinekj** **mitk** mondott [ti tk tj]? (Puskás 2000 : p.265, (89b))
 how NEG know-PRES-2SG that who-DAT what-ACC say-PAST-3SG
- c. Réka **kinek** nem tudta hogy **mikorj** **mitk** hozott Péter [ti tk tj]? (Puskás 1992 : (49b))
 Reka-NOM who-DAT NEG know-PAST-3SG that when what-ACC bring-PAST-3SG Peter-NOM?
 ‘To whom didn't Reka know what Peter had brought when?’

- d. Réka **mitk** nem tudta hogy **kineki mikorj** hozott Péter [ti tk tj]? (Puskás 1992: (49c)
Reka-NOM what-ACC NEG know-PAST-3SG that when who-DAT bring-PAST-3SG Peter-NOM?
'What didn't Reka know to whom Peter had brought when?'
- e.*Réka **kineki** **mitk** nem tudta hogy **mikorj** hozott Péter [ti tk tj]? (Puskás 1992: (49d)
Reka-NOM who-DAT what-ACC NEG know-PAST-3SG that when bring-PAST-3SG Peter-NOM?

本稿では、Wh 島内部からの Wh 要素移動を可能にするプロセスを想定し、このプロセスを欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS) と呼ぶ。英語においては、このプロセスは、ある一定の構造条件を満たす場合に限り適用されると想定する。同様のプロセスがスペイン語の Wh 島事象だけでなく、基本的に対応するハンガリー語の Wh 島事象にも適用可能であることを示す。¹⁾

本稿の構成は、以下の通りである。第 1 節において、Chomsky (2000, 2001) による PIC の問題点を指摘する (Chomsky による PIC を PIC-1 と呼ぶ)。PIC と最小連結条件 (Minimal Link Condition, MLC) の同時採用は、冗長的な側面をもつ。なぜなら、MLC による多くの効果が PIC によってもたらされるからである。PIC の下でその適用範囲が狭められる MLC の全廃を目指し、すべての XP がフェイズ (Phase) を構成すると考える Müller (2004) による PIC に検討を加える (これを PIC-2 と呼ぶ)。この PIC-2 もまた、Wh 島制約の事象を適格に説明するものでないことを示す。第 2 節では、Müller (2004) が提唱する句バランス (Phrase Balance) に立脚する論法を提示し、この論法により、上の (4) と (5) などのスペイン語の用例と、(1) から (3) の英語の用例が説明されることを示す。第 3 節では、最初にハンガリー語の文構造と多重疑問文に検討を加える。第 4 節では、スペイン語における Wh 島制約を説明する論法が基本的にハンガリー語の多重疑問文と Wh 島の事象をも説明可能であることを示す (当該事象を説明する論法に関する両言語での相違にも言及する)。この論法は、ハンガリー語において弱交差 (Weak Crossover, WCO) が観察されないことに立脚するものである。第 5 節は結びを構成し、本稿で提案する欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS) に基づく論法に対して問題を惹き起こすと思われる用例に検討を加え、これに対するひとつの打開策を提示する。

1. PIC-1 と PIC-2 の概要と問題点

1. 1. PIC-1

Chomsky (2000) によれば、派生は C あるいは v を含む語彙配列によって決定されるフェイズを単位として進行する。つまり、フェイズは派生における基本単位として機能し、フェイズ毎に演算処理が適用される。フェイズが下線で表記さ

れた（8）において、フェイズが HP から直接上位の ZP に移行すると、演算の適用が完了したとみなされる下位のフェイズ (HP) は、その一定部分を除いて演算の適用に関して見えなくなり、演算の負担が軽減される。（9）にあるように、演算の適用に関して依然として見えるこの一定部分として、主要部 (H) と先端部 (Edge) を想定している。本稿では、先端部とは Spec (H) と HP に付加した位置であると仮定する (Chomsky 2001 : p.13)。

(8) [ZP ... Z [HP ... H YP]]

(9) *Phase Impenetrability Condition* (PIC-1) (Chomsky 2000 : p.108)

In phase α with head H, the domain of H is not accessible to operations outside α ,
only H and its edge are accessible to such operations.

つまり、ZP フェイズにおいて適切に演算処理を受けるためには、YP 内の最大投射は H の先端部 (Edge) へ移動していなくてはならないのである。

(1) の用例で考えてみよう (説明上、vP フェイズの派生段階を割愛し、CP フェイズのみの派生段階である (10) で考える)。

- (10) a. [cp whoi [C [ti had borrowed what]]]
 b. [cp whoi [C you wondered [cp ti' [C [ti had borrowed what]]]]]
 c. [cp [C [you wondered [cp whatj [cp whoi [C [ti had borrowed tj]]]]]]]

素性による最小連結条件 (Featural MLC) により、(10a) における embedded C (embd.C) の素性 [*wh*] (Chomsky 2000 では [Q]) は、主語 Wh 要素 (who) との照合により削除される。次いで、matrix C の素性 [*wh*] が照合・削除される必要がある。この素性 [*wh*] は、embd.C の先端部に移動した主語 Wh 要素 (who) との照合により削除される (10b)。しかしながら、この派生は破綻する。これは、matrix V (wonder) の選択素性が満たされないためである。matrix V (wonder) は、その Spec 位置に顕在的な Wh 要素が生起する CP を要求するからである。それでは、その Spec 位置に主語 Wh 要素 (who) が生起する embd.CP に目的語 Wh 要素 (what) が付加した派生である (10c) は収束するであろうか。先端部に移動した目的語 Wh 要素 (what) は matrix C の素性 [*wh*] を照合・削除できるのではないであろうか。

派生に関する経済性が局所的に、例えば CP フェイズ毎に評価されると考えてみよう。目的語 Wh 要素 (what) が embd.CP に付加移動する誘因を embd.CP 内に見いだすことはできない。この付加移動の引き金となる素性等が embd.CP 内に存在しないからである。この付加移動は、単に matrix CP フェイズの収束を確保するためであると考えられる。結果として、この付加移動自体が経済性の原理

から排除されることになる。つまり、(1) に対して収束する派生を想定することはできない。同様に、(2) と (3) の英語の用例もすべて崩壊する (非文 (非文法的) と予測される)。(4) と (5) のスペイン語の用例も、すべて不適格と予測されることになる。本稿の第 3 節で詳述するように、ハンガリー語における素性 [*wh*] は、C よりも下位に生成される F (ocus) に付与される (ハンガリー語では、CP に代わって FP がフェイズを構成すると考えてみよう)。(6) と (7) における matrix V ((*nem*) *tud* '(not) to know) は、Wh CP を選択する。つまり、当該動詞は、*embd.Spec*(F) に具体的な Wh 要素の生起を要求することになる (*Spec*(F) に要素が生起する派生において、定動詞は F 位置で発音されるのが通常である)。この前提の下では、ハンガリー語の用例である (6) と (7) のすべてが非文と予測されることになる (CP がフェイズを構成すると相違した場合でも、(6) と (7) のすべてが非文 (非文法的) と予測されることになる)。しかしながら、この予測は問題を引き起こす。²⁾

1. 2. PIC-2 (Phrase Impenetrability Condition)

フェイズのサイズが小さいほど、演算処理における負担がより軽減される。結果として探査要素 (Probe) とそれを照合する目標要素 (Goal) との局所性を規定することになる PIC-1 は、局所性の規定に関して、最小連結条件 (MLC) と部分的に重複する (MLC の効果の多くは、PIC-1 から導出される)。そこで、Müller (2004) は、すべての句 (phrase) がフェイズを成すと考える (Phrase Impenetrability Condition (PIC-2))。PIC-2 とそれに関連する概念の定義体系は以下の通りである。

- (11) Phrase Impenetrability Condition (PIC-2) (Müller 2004 : (12)) :

The domain of a head X of **a phrase** *XP* is not accessible to operations outside *XP* ;
only X and its edge are accessible to such operations.
- (12) Feature Condition (FC) (Müller 2004 : (9)) :

An (uninterpretable) [*F*] feature on X requires movement of an item marked [F] to the edge of X
- (13) Last Resort (LR) (Müller 2004 : (10)) :

Movement requires matching [F] and [*F*] at an edge.
- (14) Strict Cycle Condition (SCC) (Müller 2004 : (11)) :

Within the current *XP* α , a syntactic operation may not target a position that is included within another *XP* β that is dominated by α .

移動の引き金となる探査素性 (Probe) である解釈不可能な素性 [*F*] が存在す

ると仮定する。[*F*] がその引き金となる移動に対して目標要素 (Goal) を構成するのが素性 [F] である。素性 [F] をもつ要素は、素性 [*F*] を付与されたゼロ範疇の先端部へ移動する (素性条件 (Feature Condition, FC))。すべての移動は、先端部 (Edge) での [F] と [*F*] との一致を要求する (すべての移動は、先端部 (Edge) での [F] と [*F*] との一致によってのみ駆動される) (最終手段) (Last Resort, LR)。³⁾

次に、Müller (2004) が提唱する句バランス (Phrase Balance) について考える。Wh 要素が [-wh] CP 内部から長距離移動する派生 (15a) において、当該 Wh 要素が *embed.Spec(C)* の位置を経由する根拠は何であろうか。同様に、(15b) に対応する構造 (15c) の vP フェイズにおいては、Wh 要素 (*to whom*) を v の先端部へと移動させる素性が存在しないように思われる (v は V の目的語 NP (*the book*) と一致していて、これ以上 Wh 要素 (*to whom*) を引きつけることはないと考えられる)。⁴⁾

この問題を開拓すべく、Chomsky (2000 : p.109) は、例えば (15c) の v に隨意的に EPP 素性が付与されると仮定している。明らかに、この前提は、派生の収束を可能にするためだけのものである。先端部位置への移動を可能にするために想定されたこの隨意的 EPP 素性がもたらす効果が、何らかのより一般的な条件から導出されないのであろうか。

- (15) a. *Whati do you think [cp ti'] he bought ti?*
 b. *To whom did John read the book?*
 c. *[vP to whom [vP John v [vP read the book t]]]*

その方法として、Müller (2004) は、句バランスの概念を導入している。これは、あらゆる素性 [*F*] に関して、すべての句 (XP) に対してバランス状態を要求するものである。以下が、句バランスに関する定義体系である。

- (16) Phrase Balance (Müller 2004 : (14)) :
 Every XP has to be balanced: For every feature [*F*] in the numeration there must be a potentially available feature [F] at the XP level.
- (17) Potential Availability (Müller 2004 : (15)) :
 A feature [F] is potentially available if (i) or (ii) holds:
 (i) [F] is on X or edge X of the present root of the derivation.
 (ii) [F] is in the **workspace** of the derivation.

派生 D のワークスペース (Workspace) は概略、語彙列挙 (Numeration N) の中で派生 D の段階でまだ利用されていないものを指す。句バランスにより、(15a)

のような単一の Wh 要素が関与する派生における移動では、移動要素がその始発点と最終着地点との間にあるすべての句 (XP) の先端部を経由することになる。単独の Wh 要素が関与する派生では、当然のことながらそのワークスペース内に素性 [wh] をもつ他の Wh 要素がない。よって、当該 Wh 要素は、当該要素の生成位置を含む最小のフェイズの先端部へ移動する必要がある。この移動は、素性の一致 (Feature Matching) によるものではない (この点で、この移動は (13) の最終手段に抵触する)。しかしながら、それが違反不可能である制約 (FC, SCC, PIC-2 と句バランス (Phrase Balance)) を満たす唯一の派生方法である場合に限り、当該派生における最終手段への違反が許容されると想定される (つまり、この場合に限り、素性の一致 (Feature Matching) が関与しない移動が可能となる)。例えば、以下の (18) の派生で考えてみよう。

(18) (guess) what John read

- a. [vp read₃ what₁] → Workspace : {C [*wh*], John, T [*D*], v}
- b. [vp what₁ read₃ t₁] → Workspace : {C [*wh*], John, T [*D*], v}
- c. [vp what₁ John₂ v + read₃ [vp t₁' t₃ t₁]]] → Workspace : {C [*wh*], T [*D*] }
- d. [tp what₁ John₂ T [vp t₁'' t₂ v + read₃ [vp t₁' t₃ t₁]]]] → Workspace : {C [*wh*] }
- e. [cp what₁ C [tp t₁'' John₂ T [vp t₁'' t₂ v + read₃ [vp t₁' t₃ t₁]]]]] → Workspace : {φ }

句バランスの要請から、VP フェイズ内に生成される Wh 要素 (what) は V の先端部へ移動する (18b)。同様に、当該 Wh 要素は v と T それぞれの先端部を経由して、最終着地点である Spec(C) へ移動する。既に述べたように、(18b) におけるような LR に違反する Wh 要素移動は、句バランス等の違反不可能な制約を満たす派生が他に存在しない場合に限り適用される。(17-ii) の要請から、ワークスペース内に素性 [wh] が存在する派生では、この LR に違反する移動は許容されないことになる (句バランスを満たす他の派生が存在する)。同時に、この派生は、PIC-2 によって排除され、不適格と予測される。このことは、以下の優位条件 (Superiority Condition) が関与する用例によって示される。

(19) a. (I wonder) who₁ t₁ bought what₁ (Müller 2004 : (17a))

b.* (I wonder) what₁ who₁ bought t₁ (Müller 2004 : (17b))

(20) (Müller 2004 : (19a-d))

- a. [vp bought₃ what₂] → Workspace : {C [*wh*], who₁ [wh], T [*D*], v}
- b. [vp who₁ v + bought₃ [vp t₃ what₂]]] → Workspace : {C [*wh*], T [*D*] }
- c. [tp who₁ T [vp t₁ v + bought₃ [vp t₃ what₂]]] → Workspace : {C [*wh*] }
- d. [cp who₁ C [tp t₁ [vp t₁ v + bought₃ [vp t₃ what₂]]]]] → Workspace : {φ }

(19) の派生構造で (20a) からもわかるように, VP はバランスがとれている。それは, そのワークスペース内に素性 [wh] (つまり, Wh 要素 (*who*)) が存在するためである。よって, Wh 要素 (*what*) が V の先端部へ移動することはない。換言すれば, 当該 Wh 要素 (*what*) が VP 外部へ移動することはない (PIC-2)。結果として, (19a) のみが生成されることになる。

PIC-1 と同様に, PIC-2 は, 本稿の (1) から (7) の用例のすべてを不適格と予測する。関係する Wh 要素が異なるフェイズ内に生成される派生においては, より上位の Wh 要素の素性がワークスペース内にあるため, 下位の Wh 要素がそのフェイズ外へ移動することは許されない (英語とスペイン語では, 最上位のフェイズ内に生成される Wh 要素が *embd.Spec(C)* へ移動する。ハンガリー語では, *embd.Spec(F)* へ移動する)。関係する Wh 要素が共に同じフェイズ内に生成される派生においては, 一方の Wh 要素のみがその先端部へ移動可能である (英語とスペイン語では, この Wh 要素のみがこのフェイズの外へ出て, *embd.Spec(C)* へ移動する, ハンガリー語では, *embd.Spec(F)* へ移動する)。この何れの派生においても, *embd.Spec(C)* (*embd.Spec(F)*) 位置に痕跡が生成される。これらの派生は, その Spec 位置に顕在的な Wh 要素が生起する CP を要求するという matrix V の選択素性を満たさないため, (1) から (7) の用例はすべて不適格と予測される。明らかに, この予測は事実に合致しない。⁵⁾

2. 欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS)

Müller (2004) は, 談話 (Discourse) に連結された Wh 要素 (D-Linked Wh 要素) が生起する用例 (21A-a) と (21A-b) の相違を以下のように説明する。D-Linked Wh 要素が随意的にその素性 [wh] を欠くと想定する ((21A-b) において, Spec(v) 位置に生成される主語 D-Linked Wh 要素 (*which people*) の素性 [wh] が欠落している)。これにより, VP フェイズにおいて, Wh 要素 (*what*) はその先端部へ移動可能となる (この派生段階のワークスペースには素性 [wh] が存在しないと考えられる)。当該 Wh 要素 (*what*) は, 順次, その Spec 位置に主語 Wh 要素 (*who*) が生成される v を含むすべてのフェイズの先端部を経由して, Spec(C) まで移動する。これにより, (21A-b) は生成されることになる ((21A-a) 中の主語は D-Linked Wh 要素でないため, 当該用例は, 上の (19b) と同様不適格と予測される)。

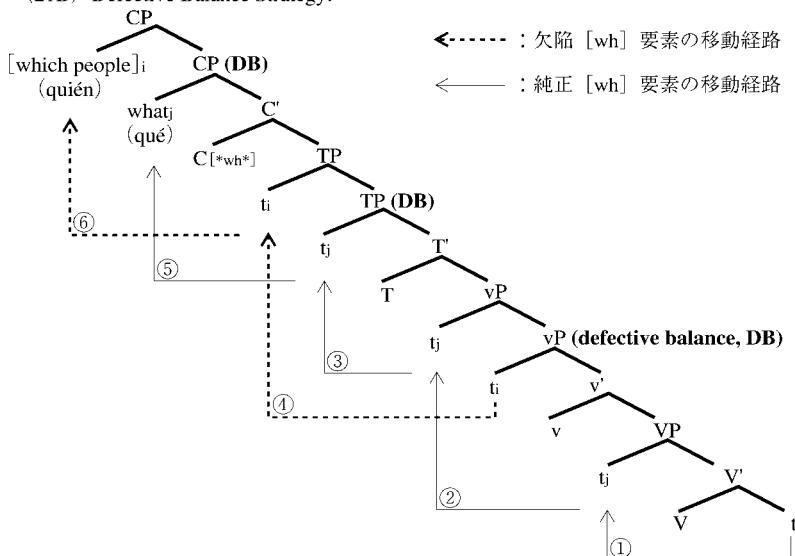
- (21A) a.*I know [which books]_j wh_i read _{t_j} (Müller 2004 : (46a))
 b. I know what_j [which people] read _{t_j} (Müller 2004 : (46b))

- c. *I know [which people] what read
 d. I know who read [which books]

ここで、欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy, DBS) を仮定する。(21A-b) における D-Linked Wh 要素 (*which people*) が、ワクスペース内における素性 [wh] を構成しないという点で、欠陥 [wh] 要素 (Defective [wh] Element) として機能すると考えてみよう (これにより、(21A-b) においてより下位のフェイズ内部に生成される Wh 要素 (*what*) の上昇移動が可能となる)。これと連動して、欠陥 [wh] 要素を含むフェイズが欠陥バランス (Defective Balance, DB) と指定されると考える。更にこの DB は、素性 [*wh*] を付与された最寄りの X^0 範疇の最大投射フェイズに到達するまで順次上位のフェイズに上昇浸透すると想定する (英語とスペイン語では、この X^0 範疇として C が指定される。ハンガリー語では、F が指定される)。上昇浸透したフェイズ内部に生成された Wh 要素は欠陥 [wh] として機能する。欠陥 [wh] 要素として機能することのない通常の Wh 要素を純正 Wh 要素と呼ぶことにする。上昇浸透によって DB と指定されたフェイズのバランスは、純正 [wh] 素性の Wh 要素が当該フェイズの先端部へ移動することに加えて、欠陥 [wh] 素性をもつ Wh 要素が当該フェイズの先端部への移動によって初めて確保されると想定する。⁶⁾

具体的に、(21A-b) の用例に対応する (21B) の派生構造で考える。

(21B) Defective Balance Strategy:



VP フェイズにおいて、目的語 Wh 要素 (*what*) は、V の先端部 (Spec (V)) へ移動する (①)。vP フェイズにおいて、この Wh 要素 (*what*) は、v の先端部へ移動する (これにより、vP のバランスが確保される) (②)。TP フェイズに入って、最初に純正 [wh] 素性をもつ Wh 要素 (*what*) が T の先端部へ移動する (③)。次いで、欠陥 [wh] 素性もつ Wh 要素 (*which people*) が T の先端部へ移動する (これにより、TP のバランスが確保される) (④)。同様に、CP フェイズにおいて、最初に Wh 要素 (*what*) が C の先端部 (Spec (C)) へ移動する (⑤)。次いで Wh 要素 (*which people*) が C の先端部へ移動する (これにより、CP のバランスが確保される) (⑥)。しかしながら、問題なのは、この派生様式によって生成されるのは (21A-b) ではなく、不適格と判断される (21A-c) の多重疑問文であることである。この問題は、欠陥 [wh] 素性をもつ要素がより上位にあるフェイズのバランス確保のために形成される連鎖 (④+⑥) の元位置 (in-situ) で発音されると仮定することにより打開されると思われる ([+Finite] CP 内において、主語 D-Linked Wh 要素の元位置として、主格 (Nominative) が照合を受ける Spec (T) を仮定する。目的語 D-Linked Wh 要素の元位置として、その生成位置を想定する)。(21A-a)においては、より上位のフェイズに生成される Wh 要素 (*who*) が D-Linked Wh 要素でないため、DBS は適用されない。これは、目的語 Wh 要素 (*which book*) が生成される VP フェイズのバランスが確保されているため、この目的語 Wh 要素が VP の先端部へ移動できないためである。PIC-2 が適用され、より上位のフェイズ内部に生成された Wh 要素 (*who*) が素性 [*wh*] を付与された *embd. C* の先端部へ移動する (21A-d) が生成されることになる。^{7) 8)}

(21A-b) の派生を説明すると思われる論法によって、(4) と (5) のスペイン語の用例の相違が適格に処理される (便宜上、当該用例を以下に再掲する)。

- (4) a. *Quién* no sabes [qué película]_j dirigió *ti* *tj* en el cincuenta y uno? (Torrego 1984: (68))
 ‘Who don't you know what movie directed in '51'?’
 b.* *Quién* [Qué película]_j no recuerdas *quién* dirigió *ti* *tj* en el cincuenta y uno? (Torrego 1984: (69))
 ‘What movie don't you remember who directed in '51'?’
- (5) a. *[A quién]* *i* dices que no te acuerdas *qué* *le* *i* has dicho *tj* *ti*? (Torrego 1984: (54a))
 ‘To whom do you say that you don't remember what you have said?’
 b.* *Qué* *dices* que no te acuerdas *[a quién]* *i* *le* *i* has dicho *tj* *ti*? (Torrego 1984: (54b))
 ‘What do you say that you don't remember to whom you have said?’
- (22) a. [CP *quién* [CP [qué película]_j [TP dirigió . . . *ti* *tj* en el cincuenta y uno]]]
 b. [CP [a quién]_i [TP *le* has dicho *ti* *qué*]]
 c. [CP [a quién]_i [CP [qué]_j [TP *le* has dicho *ti* *tj*]]]

欠陥 [wh] 素性が、より上位に生成された（つまり、始発点がより上位に指定された）[±D-Linked] Wh 要素に付与可能と考えてみよう（本稿の註（7）を参照されたい）。主語 Wh 要素（*quién 'who'*）と直接目的語 Wh 要素（*qué película 'what movie'*）が生起する（4a）の用例について考える。（22a）の embd.CP 構造が生成されることになるが、これは、上の（21A-c）の embd.CP 構造に並行するものである（この状況は、派生構造（21B）で示される）。CP フェイズの先端部にある Wh 要素の中で最上位にある欠陥 [wh] 要素として機能する主語 Wh 要素（*quién*）が matrix C の素性 [*wh*] を照合・削除すると考える（この照合・削除のため、主語 Wh 要素（*quién*）は、matrix Spec(C) で発音される。matrix C に素性 [*wh*] が付与されない派生では、欠陥 [wh] 要素として機能する主語 Wh 要素（*quién*）は、その元位置で発音される）（embd.Spec(C) 位置に顕在的な Wh 要素（*qué película 'what movie'*）が生起するため、matrix V が [+wh] CP を要求するという選択性も満たされる）。これにより、（4a）の適格性が説明可能となる。後述する（24b）と異なり、（4b）における直接目的語 Wh 要素に対応する再述接語を随伴していない。主語要素のよりも上位に生成される Spec(Agr-DO) が直接目的語 Wh 要素の始発点と指定される可能性はない。結果として、（4b）は生成不能となる。

直接目的語（DO）と間接目的語（IO）が共起する（5）のスペイン語の用例は、問題になるように思われる。それは、DO と IO が共に VP 内部に生成されると考えられるためである。つまり、IO と DO の一方のみが、VP の先端部に移動するだけでよい（これにより、VP のバランスが確保される）（双方の Wh 要素が VP の先端部に移動することはない）。IO が VP の先端部へ移動する派生では、（22b）が最も深く埋め込まれた C1P の構造となる。この embd.Spec(C1) へ移動した IO Wh 要素は最終的に matrix Spec(C) へ移動し、DO Wh 要素（*qué*）は VP フェイズ内部にある。つまり、この場合の派生は、生成不能となる。このことは、DO Wh 要素（*qué*）が VP の先端部へ移動する派生でも同様である。これにより、以下の Jaeggli（1982）が挙げる用例（23a）と（23b）の非文法性が説明される（Jaeggli（1988）においては、主語要素と直接目的語要素が共起する用例の判断は、Torrego（1984）の用例（4）と同様である（23c, d））。

- (23) a. **[_c [A quién] i no sabías qué] lei regalaron t_j t_i?* (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b))
 ‘To whom didn't you know what they had given?’
 b. **El único encargo quei no sabías [a quién] j iban a dar t_i t_j cayo justó en tus manos.*
 (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151a))

- ‘The only task which you didn't know to whom they would give wound up right in your hands.’
- c. *¿Quién* no sabes *qué* compró *ti* *tj*? (Jaeggli 1988: (45a))
 ‘Who don't you know what bought?’
- d. **¿Qué* no sabes *quién* compró *ti* *tj*? (Jaeggli 1988: (45b))
 ‘What don't you know who bought?’

それでは、DO と IO が共起する (5a) と (5b) の相違はどのように説明されるのであろうか。Torrego (1984) が属する話者グループにおいて、適格な派生として、IO Wh 要素 (*a quién* 'to whom') が DO (*qué* 'what') が形成する Wh 島内部から移動する派生が可能である。これは、IO Wh 要素の始発点として、v よりも上位に生起する Spec(Agr-IO) が指定されることにより可能となる(通例、IO 要素は、対応する IO 再述接語 (*le*, *les*) を随伴する)。これに対応する CP 構造である (22c) によって示されるように、IO WH 要素 (*a quién*) が長距離移動する派生が適格と予測される (Jaeggli (1982, 1988) が属する話者グループでは、Spec(Agr-IO) が IO Wh 要素の始発点と指定されることはないと考えられる)。また、IO Wh 要素と主語 Wh 要素が生起する用例においては、IO Wh 要素が長距離移動する用例が適格と予測される。このことは、(24a) の文法性によって例証される。主語 Wh 要素と対応する DO 再述接語 (例えば、*lo*) を随伴する DO Wh が共起する用例において、DO Wh 要素が長距離移動する派生が適格と予測される (DO 再述接語を随伴する DO Wh 要素の始発点として、v よりも上位に生成される Spec(Agr-DO) が指定される)。この予測は、(24b) によって示される。適格と判断される (24b) は、不適格と判断される (4b) と好対照をなす。既に述べたように、(4b) における DO Wh 要素 (*qué película*) は、対応する再述接語を随伴していない。(4b) が不適格と判断されるのは、DO Wh 要素の始発点として、Spec(Agr-DO) ではなく、主語 Wh 要素 (*quién*) の始発点よりも下位である V の Sister 位置が指定されたためであった。

- (24) a. *[A cuáles de ellos]*; sabes *quién* no *les* dio *ti* *tj* una buena recomendación? (Suñer 1992: (40c))
 ‘Which of them do you know who didn't give them a good recommendation?’
- b. *[Qué libro]*; no sabes *quién* *lo* compró *ti* *tj*? (Contreras 1992: (11b))
 ‘What book don't you know who bought it?’

次に、基本的に適格と判断される (3a) などの英語の用例に検討を加える (便宜上、(1) から (3) を以下に再掲する)。(4a) などのスペイン語の用例の適格性を説明する DBS は、Barss (2000) が挙げる用例 (3a) を適格と予測する。これは、上のスペイン語の用例 (24a-b) に並行するものである (長距離移動する DO Wh 要素が D-Linked Wh 要素であるため、その始発点として v より上位の

Spec(Agr-DO) が指定可能となる)。(3b) の用例は不適格と予測されるが、そのわけは、Non-D-Linked Wh 要素 (*what*) が主語 Wh 要素が構成する Wh 島を越えるからである。((2a) と (2d) の対比が示すように、Freidin (1992, 1995) が挙げる用例では、主語と DO 双方の Wh 要素が D-Linked Wh 要素である派生 (2a) のみが許容される)。同じ論法により、(1a) は不適格と予測される。それは、DO である Non-D-Linked Wh 要素が主語 Wh 島内部から移動しているからである。適格と予測されるのは (1b) であるが、それは長距離移動する主語 Wh 要素 (*who*) が DO Wh 要素 (*what*) よりも上位に生成されるからである (主語 Wh 要素の始発点が DO Wh 要素の始発点よりも上位にある)。しかしながら、実は、(1b) は予測に反して不適格と判断される。この問題を解消する論法を提示する前に、Adger (2003) が指摘する話者グループにおける判断を以下の (25) に示しておく。特に、(25b) と (25d) の適格性に対して、(25c) が不適切と判断される点が非常に興味深い。

- (1) a.*Whati did you wonder who had borrowed ti?
b.*Whoj did you wonder whati tj had borrowed ti?
- (2) a. (?) [Which books]_i did John wonder [which students] had borrowed ti? (Freidin 1995: (22))
b.* [Which students]_j did John wonder [which books]_i tj had borrowed ti? (Freidin 1995: (25))
c.* [Which students]_j did John wonder tj had borrowed [which books]? (Freidin p.c. (2004.12.5))
d.* [Which books]_i did she say who read ti? (Freidin 1992: p.94, (36b))
- (3) a. (?) [Which book]_i do you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000: (19))
b.?*Whati did you wonder who was going to buy ti? (Barss 2000: (18))
c. [What products]_i do they wonder [which age-groups] will buy ti? (É. Kiss 1993: p.93, (21))
d. [Which students]_i do you know who invited ti? (É. Kiss 1993: p.89)
- (25) a.? [Which city]_i did you ask [which king] invaded ti? (Adger 2003: p.390, (65))
b.? [Which king]_j did you wonder tj invaded [which city]? (Adger 2003: p.390, (68))
c.* [Which king]_j did you ask [which city]_i tj invaded ti? (Adger 2003: p.390, (66))
d.?Whoj did you ask tj saw what? (Adger 2003: p.390, (67))

DBS (Defective Balance Strategy) が適用される派生に関して、純正 [wh] 要素がその移動先 (embd.Spec(C)) 位置で発音されるスペイン語とは異なり、英語における純正 [wh] 要素は移動先 (embd.Spec(C)) ではなく、元位置で発音されると考えてみよう (移動先と元位置によって形成される連鎖が matrix V の選択素性を満たすと考える必要がある)。疑問文 CP をその Sister 位置に生起することを要求する matrix V の選択素性は、その Spec 位置に生起する顕在的な Wh 要素の生起だけでなく、移動先と元位置によって形成される連鎖によっても満たされる

と考える必要がある) ((25) のような複数の C に素性 [*wh*] が付与される派生とは異なり, 単一の C に素性 [*wh*] が付与される優位条件が関与する派生では, 欠陥 [wh] 要素として機能する要素がその元位置で発音されると仮定している点に留意されたい)。これにより, (25) の英語の用例が説明可能となる。 (25c) は, 純正 [wh] 要素 (*which city*) の発音位置が不適切であるため, 不適格と予測される ((25b) が適切な出力となる)。(25b) と (25d) は全く並行する派生形式に従っている (Adger (2003) が提供する (25d) の用例では, Non-D-Linked Wh 要素 (*who*) が欠陥 [wh] 要素として機能している点で, 特筆すべき話者グループに属する用例である。当該話者グループにおいて, 単一の C に素性 [*wh*] が付与される優位条件が関与する用例では, D-Linked Wh 要素のみが欠陥 [wh] 要素として機能する)。(25a) では, DO である D-Linked Wh 要素 (*which city*) の始発点として, Spec (Agr-DO) が指定される (主語 Wh 要素 (*which king*) は, 元位置 (厳密には Spec (T) 位置) で発音される)。Freidin, Barss と É. Kiss が提供する話者グループの用例では, この DBS の適用が DO D-Likned Wh 要素と主語 D-Linked Wh 要素が共起する派生 ((25a) のタイプ) に限定されているように思われる (Freidin による用例 (2d) の非文性と比較されたい)。つまり, (2a) と (3a, c-d) における主語 Wh 要素は Spec (C) ではなく, Spec (T) 位置で発音されているように考えられる。⁹⁾

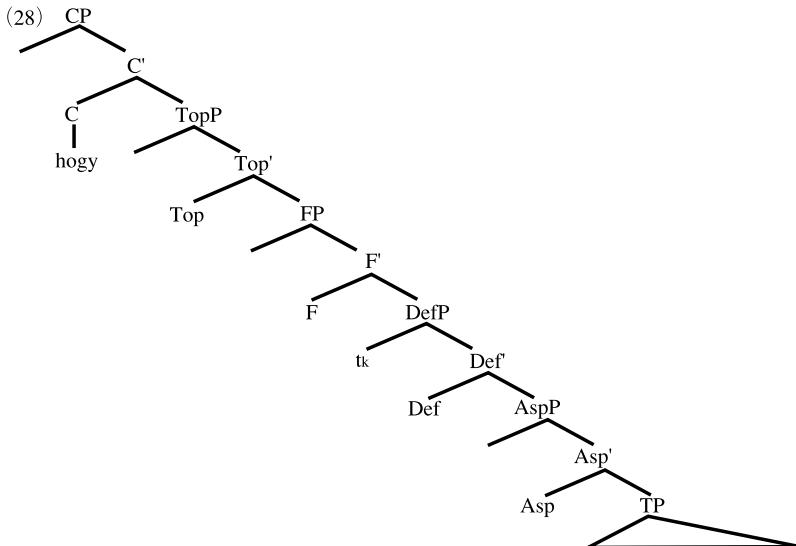
以下の (26) はすべて, 下接の条件 (Subjacency Condition), そして本稿の DBS (Defective Balance Strategy) によって不適格と予測される。しかしながら, Chomsky (1980 : p.37) によれば, ほとんどの話者が (26b) を (26a) よりもかなり認容度が高いと判断する。Freidin and Lasnik (1981) では, 主語 Wh 要素が embd.Spec (C) 位置へ移動しないことと (26b) の認容度向上とが関連づけられる (Chomsky (1986) の空移動仮説 (Vacuous Movement Hypothesis))。(26b) が完全に文法的と判断されないのは, matrix V (*wonder*) の選択素性が embd.Spec (C) 位置における Wh 要素の生起から matrix V と Wh 要素の隣接へと緩んでいるためだとされる。Freidin and Lasnik (1981) は, 主語 Wh 要素と類似のふるまいを示すものとして, 付加語 Wh 要素 (*how well*) の用例 (27a) を挙げている (当該付加語が何らかの要因によって, embd.Spec (C) と embd.Spec (T) の間の位置へ移動すると前提した場合)。Freidin and Lasnik (1981) 自身が指摘しているように, 認容度が向上する (26b) と (27a) を説明する彼等の論法は, (27b) と (27c) の双方に対しても認容度の向上を予測する。しかしながら, 彼等自身が指摘しているように, (27c) は (27b) ほど認容度が高くない ((27c) の認容度は向上し

ない) (Freidin and Lasnik 1981 : fn.14)。

本稿の DBS は、(25) の判断が下される話者グループにおいても、(26a) を生成不能と予測する。(26b) の認容度の向上は、DO Wh 要素 (*what*) (と主語 Wh 要素 (*who*)) が D-Linked Wh と解釈された派生として説明される。DO Wh 要素 (*what*) の始発点と指定される Spec (Agr-DO) は、主語 Wh 要素 (*who*) の始発点 (Spec (v)) よりも上位である (前者の DO Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として機能する、Wh 島から脱出する)。完全に適格と判断されないのは、複合 Wh 要素が生起する (2a) と (3a) の場合とは異なり、単純 Wh 要素に対する D-Linked Wh 要素として解釈が周辺的であることに還元される。このことは、(27a) における認容度の向上に対しても当てはまる (この前提となる付加語移動が周辺的に適用されると考えられる)。この場合もまた、DO Wh 要素 (*what*) が D-Linked Wh 要素と解釈され、その始発点として Spec (Agr-DO) が指定される。付加語 Wh 要素 (*how* (*well*)) の始発点 (生成位置) として主語 Wh 要素の始発点 (Spec (v)) と Spec (Agr-DO) の間の位置 (仮に、Agr-DO の直接下位に生成される Asp 最大投射に付加した位置) を想定してみよう。つまり、DO Wh 要素 (*what*) は欠陥 [wh] 要素として機能する。複合 DO Wh 要素 (*which book*) が生起する (27b) では、D-Linked Wh 要素としての解釈は問題なく実現される。(27b) の周辺性は、付加語移動の周辺性に起因する。(27c) においては、主語 Wh 要素 (*which students*) の始発点として、Spec (v) が指定される。付加語 Wh 要素 (*how well*) の始発点が主語 Wh 要素のそれよりも上位となるので、(27c) は生成不能と予測される。(27d) の非文法性が示すように、その始発点がより上位に指定される付加語が欠陥 [wh] 要素として機能することはないと考えられるからである。

3. ハンガリー語の文構造と多重疑問文

Puskás (2000 : p.170, p.325) と同様に, *pro-drop* 言語に属すハンガリー語の文構造として以下の (28) を想定する。¹⁰⁾



Spec (Top) には、話題化 (Topicalization) の適用を受けた要素が生起する。F には解釈不可能な素性 [*focus*] あるいは [*wh*] が付与されるため、素性 [focus] あるいは [wh] をもつ要素がこの Spec (F) へ移動することになる ([focus] 要素を大文字で表すことにする)。定動詞は、Asp(ect) 位置に生成される。このSpec(Asp) 位置に、動詞修飾要素 (Verbal Modifier, VM) が生成される (TP 内にある定動詞の痕跡表示は省略する) (29)。本稿では、F に素性 [*focus*] あるいは [*wh*] が付与され、同時に当該 Spec (F) 位置に移動要素の痕跡ではなく顕在的な要素が生起する場合に限り、定動詞が F 位置で発音されると考える (30)。Spec (F) 位置に顕在的な [focus] あるいは [wh] 要素が生起しない派生において、定動詞が Asp 位置で発音される (動詞そのものに素性 [focus] が付与された場合を除き、VM はそれが生成された位置から移動することはない)。このことは、以下 (31) によって例証される。

- (29) (É. Kiss 2002 : p.98, (57a-c))

- a. [TopP [A huzat]i] [FP melyik szoba ablakait]j törtek [DefP [AspP be tk [TP ti tj...]]]?
- the draft-NOM which room's wondows-ACC break-PAST-3SG VM
- ‘The windows of which did the draft broke in?’
- b. [TopP [FP Melyik szoba ablakait]j törtek [DefP [AspP be tj [TP ti a huzat...]]]]?
- c.* [TopP [FP Melyik szoba ablakait]i [DefP [AspP be törte [TP ti a huzat] ...]]]?

- (30) (É. Kiss 2002 : p.80, (7b); (8c))
- a. [TopP [Liszt Ferenc]i [FP1886-BAN]j halta [DefP [AspP meg tk [TP ti tj ...]]]].
 Ferenc Liszt-NOM 1886-in die-PAST-3SG VM
 'As for Ferenc Liszt, it was in 1886 that he died.'
- b. [TopP Jánosi [FP FOKOZATOSAN]j értettek [DefP [AspP meg tk [TP ti tj a problémát]]]].
 John-NOM gradually understand-PAST-3SG VM the problem-ACC
 'As for John, it was gradually that he understood the problem.'
- (31) (Puskás 2000 : p.177 (59a-b) ; Puskás (1992) : (20a-b))
- a. [TopP Emőkéti [FP MEG]j LÁTOGATTAK] [DefP [AspP tj tk [TP Zéta ti ...]]].
 Emőke-ACC VM visit-PAST-3SG Zéta-NOM
 'Emőke, Zéta did visit.'
- b.* [TopP Emőkéti [FP látogattak [DefP [AspP meg tk [TP Zéta ti ...]]]].
 VM-sleep-PAST-3SG the child-NOM
 'The child fell asleep'
- c. [TopP [FP [DefP [AspP elaludt [TP a gyerek ...]]]].
 VM-sleep-PAST-3SG the child-NOM
 'The child fell asleep'
- d.* [TopP [FP aludti [DefP [AspP el ti [TP a gyerek ...]]]].

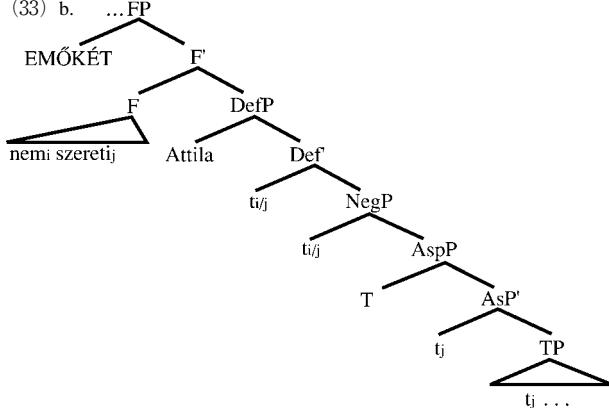
Puskás (2000) では、Def(inite) の Spec 位置に特定 (Specific) な項要素あるいは特定と想定される項要素が移動できると仮定されている (当該範疇は、F と Asp の間に生成生成される)。よって、特定である項要素 (Jánost 'John-ACC') が左端位置に生起する (32a) に対して、(32b, c) の構造が想定可能となる。

- (32) a. Jánost el ütötte a vonat. (Puskás 2000 : p.144, (8))
 John-ACC VM hit-PAST-3SG the train-NOM
 'The train hit John'
- b. [TopP Jánost [FP [DefP [AspP el ütötte [TP ti a vonat ...]]]].
 c. [TopP [FP [DefP Jánost [AspP el ütötte [TP ti a vonat ...]]]].

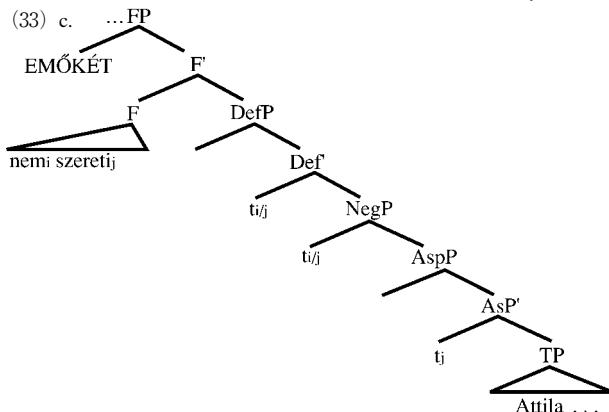
Puskás (2000 : pp.324-325) は、(33a) に対して (33b) の構造を想定する (Neg (*nem* 'not') が定動詞と共に複合主要部 (Complex Head) を構成して、F 位置へ移動する (F 位置で発音されると前提されている)。しかしながら、(33a) に対して、主語要素 (Attila) が TP 内に留まっている派生 (33c) を想定することも可能である。しかしながら、この Def の投射の存在は、VM が生起する (32a, c) によって例証される ((34b, d) は、(34a, c) それぞれの派生構造を示す) (本稿では、定動詞自体に素性 [focus] が付与され Spec(F) 位置へ移動する派生を除き、VM は Spec(Asp) に留まると想定されている点に留意されたい)。

- (33) a. EMŐKÉT nem szereti Attila. (Puskás 2000 : p.324, (30))
 Emőke-ACC NEG love-PRES-3SG Attila-NOM
 'It is Emőke that Attila doesn't love.'

(33) b.



(33) c.

(34) a. PÉTERT mutatta János be Marinak. (É. Kiss 2002 : p.85, (20a))

Peter-ACC introduce-PAST-3SG John-NOM VM Mary-DAT

'It is Peter that John introduced Mary.'

b. [TopP [FP PÉTERTi mutattaj [DefP Jánosk [AspP be tj [TP tk ti ...]]]]]].

c. (?) PÉTERT mutatta János Marinak be. (É. Kiss 2002 : p.85, (20b))

d. [TopP [FP PÉTERTi mutattaj [DefP Jánosk [DefP Marinak [AspP be tj [TP ti ...]]]]]].¹¹⁾

この Def の投射は, Brody (1995a) の立論による弱交差 (WCO) に関連すると思われる。英語用例の (35a-b) において, Wh 要素 (*who*) とその痕跡 (変項 (Variable)) との間に, 当該 Wh と同一指標の関係にある変項 (この場合, *his*) の生起が許容されない。以下の用例からも判明するように, 英語と異なり, ハンガリー語では標準弱交差 (Standard Weak Crossover) の効果が観察されない。Bródy (1995a : (7)) は, WCO の制約を (36) のように定義する。

- (35) a.*Whoi does hisi mother like ti best? (Puskás 1997 : (16a))
 b.*Who does hisi mother say Mary likes ti best? (Puskás 1997 : (16b))
 c. Kit szeret az *proi* anyja ti? (Bródy 1995a : (6a))
 Who-ACC like-3SG the *pro* mother-NOM
 ‘Who does his mother like?’
 d. Kiti latott az *proi* anyja ti? (Puskás 2000 : p.293, (8))
 Who-ACC see-PAST-3SG the *pro* mother-NOM
 ‘Whoi did hisi mother see?’
 e.*Kiti mondta az *proi* anyja hogy a fiú látták ti? (Puskás 2000 : p.293, (8))
 Who-ACC say-PAST-3SG the *pro* mother-NOM that the boys-NOM see-PAST-3PL
 ‘Whoi did hisi mother say that the boys saw?’
 f.*Kiti mondott az *proi* anyja hogy Mari szeret ti? (Bródy 1995a : (10))
 Who-ACC say-PAST-3SG the *pro* mother-NOM that Mary like-3SG
 ‘Whoi did hisi mother say that Mary likes?’

(36) The Crossover Constraint :

A pronoun to be interpreted as a variable needs an occurrence of the relevant variable in A-position on its left.

ここで、この A-Position として Spec(Def) を想定してみよう (Brody (1995a : p.35) では、当該位置として目的語が LF においてその格素性などの照合 (Checking) を受ける Spec(AgrO) が前提されているが)。換言すれば、Wh 要素 (kit 'whom') は、Spec(F) への A' 移動に先だって、Spec(Def) へ A 移動していることになる。これにより、(35c-d) の適格性が説明される。A 移動が有時制節を超えて構成されることはないと考えると、(35e-f) においては、matrix CP 内にある *pro* の左方に Wh 要素 (kit 'whom') が matrix Spec(Def) 位置へ A 移動不可能となる (当該 Wh 要素が移動する Spec(Def) は、embd.CP 内にある)。つまり、WCO によって (35e-f) が排除されることになる。

次に、多重疑問文について考える。英語と異なり、ハンガリー語の多重疑問文では、Wh 要素が定動詞の左方位置に生起する。¹²⁾

- (37) a. Who saw what? (Puskás 2000 : p.233, (31a))
 b.*Ki látott mit? (Puskás 2000 : p.233, (31b))
 who-NOM see-PAST-3SG what-ACC
 c. Ki mit látott? (Puskás 2000 : p.294, (10a))
 d. Mit ki látott? (Puskás 2000 : p.294, (10b))
- (38) a. Kinek mit hozott János? (É. Kiss 1993 : (37a))
 who-DAT what-ACC bring-PAST-3SG John
 ‘For whom did John bring what?’
 b. Mit kinek hozott János? (É. Kiss 1993 : (37b))
 ‘What did John bring for whom?’

上の (37c, d) と (38a-b) 等の適格性から、ハンガリ一語では優位条件 (Superiority) が関与しないと思われる。しかしながら、以下の用例 (39b) と (40b) は、この優位条件の存在を想起させる。付加語 Wh 要素 (*miért 'why', hogyan 'how'*) が左端に生起する用例は非文 (不適格) と判断される。その一方で、(41a-b) の用例からも判明するように、これらの付加語に対応する D-Linked 付加語 Wh 要素が左端に生起する派生は、適格と判断される。É. Kiss (1993, 2002等) に従って、項である NP (DP) Wh 要素と [±] 項の D-Linked Wh 要素が特定 (Specific) と解釈されると考えてみよう ([−] 項である単純付加語 Wh 要素 (*miért 'why', hogyan 'how'*) は、特定要素として機能することはない想定する)。換言すれば、項である単純 DP Wh 要素が、適切な文脈において D-Linked Wh 要素として振る舞うと言うことができる。

- (39) a. **Ki hogyan** viselkedett? (É. Kiss 2002 : p.103, (72a))
 who-NOM how behave-PAST-3SG
 'who said how?'
 b.?***Hogyan ki** viselkedett? (É. Kiss 2002 : p.103, (72b))

- (40) a. **Ki miért** hazudott? (É. Kiss 2002 : p.103, (73a))
 who-NOM why lie-PAST-3SG
 'who lied why?'
 b.***Miért ki** hazudott? (É. Kiss 2002 : p.103, (73b))

- (41) a. **[Melyik módon] ki** oldotta meg a feladatot? (É. Kiss 2002 : p.103, (74b))
 [which way-SUPERES] who-NOM solve-PAST-3SG the problem
 'who solved the problem in which way?'
 b. **[Mely okból] ki** hazudott? (É. Kiss 2002 : p.103, (74c))
 [which reason-ELAT] who-NOM lie-PAST-3SG
 'who lied for which reason?'

さらに、*hány 'how many'* によって導入される Wh 要素が特定 (Specific) と解釈されないと考える (É. Kiss 1993 : p.87 ; p.97, (34))。 (42d) のように、限定する要素 (*a ház 'the house'*) を伴う部分表現は、特定と解釈される。

- (42) a. **Kire [hány szavazat]** jutott? (É. Kiss 2002 : p.103, (75a))
 who-SUBLAT [how-many votes-NOM] fall-PAST-3SG
 'How many votes fell on whom?'
 b.* **[Hány szavazat] kire** jutott? (É. Kiss 2002 : p.103, (75a))
 c.***Hány diákok** ki buktatott meg? (É. Kiss 1993 : (45))
 how-many student-ACC who-NOM fail-PAST-3SG VM
 'Who failed how many students?'

- d. **A ház hányadrészét ki örökli?** (É. Kiss 1993 : (48))
 the house-GEN how-manyeth-part-ACC who-NOM inherit-PRES-3SG
 ‘Who inherits what part of the house?’

Wh 要素に名詞 (*a fene* 'the hell') が付加された項 Wh 要素は、D-Linked Wh 要素として機能することはできない (Aggressively Non-D-Linked Wh-Phrase)。よって、当該要素が特定 (Specific) と指定されることはない。É. Kiss (1993, 2002等) に従う限りにおいて、不特定 (Non-Specific) と指定される要素が左端に生起する多重非問文が非文と判断されることになる (本稿で提案される論法による説明法は、後述の予定である)。

- (43) a. **Mit [ki a fene] mondott?** (É. Kiss 2002 : p.104, (76a))
 what-ACC [who the hell-NOM] say-PAST-3SG
 ‘Who the hell said what?’
 b.* **[Ki a fene] mit mondott?** (É. Kiss 2002 : p.104, (76b))

動詞 (*gondol* 'think') は [−wh] CP を選択するため、(44a, b) は、非文と判断される ((44d) では、当該動詞が要求する選択素性が満たされている)。一見して、(44c) の用例は、embd.CP 内からの複数の Wh 要素移動が排除されることを物語ると思われる。事実、Richards (1996) は、(44c) の非文性を embd.Spec (C) に生起、あるいは当該位置を経由する要素が单一であると考えることによって説明する。これにより、(44d) の適格性が説明されることになる (本稿の枠組みからみた説明法については、後述する)。

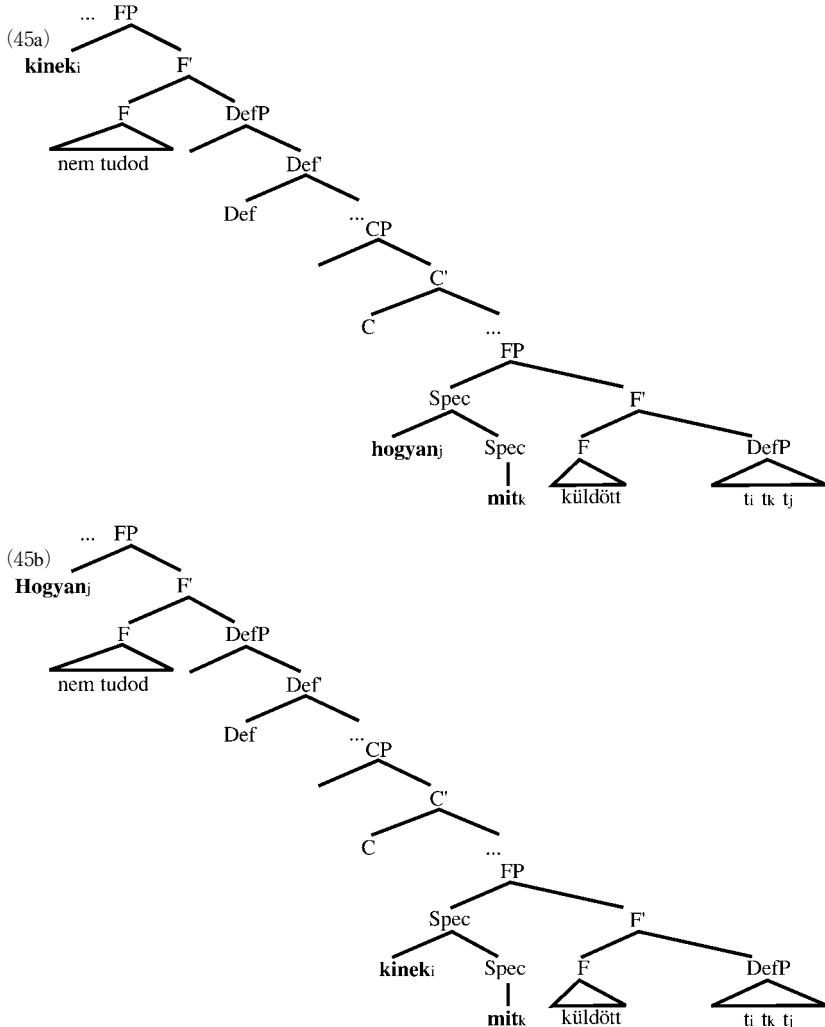
- (44) a.***Zéta gondolta [hogy Emőke kineki mit] mondott ti tj.** (Puskás 2000 : p.261, (83a))
 Zéta-NOM think-PAST-3SG that Emőke-NOM who-Dat what-ACC say-PAST-3SG
 b.***Zéta kineki gondolta [hogy Emőke mit] mondott ti tj.** (Puskás 2000 : p.261, (83b))
 Zéta-NOM who-Dat think-PAST-3SG that Emőke-NOM what-ACC say-PAST-3SG
 c.***Zéta kineki mit gondolt [hogy Emőke mondott ti tj].** (Puskás 2000 : p.262, (83c))
 Zéta-NOM who-Dat what-ACC think-PAST-3SG that Emőke-NOM say-PAST-3SG
 d. **Zéta mit gondolt [hogy Emőke mondott tj].** (Puskás 2000 : p.262, (83d))
 Zéta-NOM what-ACC think-PAST-3SG that Emőke-NOM say-PAST-3SG
 ‘What did Zéta think that Emőke said?’

既に述べたように、本稿の (6) と (7) もまた、ハンガリー語の興味深い特性を示すものである (便宜上、当該用例を再掲する)。(6a-b) は、一般的に Wh 島内部からの Wh 要素移動が許容されることを示す。上の (44c) の場合と同様、Richards (1996) と É. Kiss (2002 : p.254) は、(6a-b) の適格性を单一の Wh 要素が embd.Spec (C) を通過できることに還元する (Richards (1996) では、embd. CP

中の Wh 要素 (*mit* 'what', *kinek* 'to whom') は C よりも下位に生成される多重 Spec をもつゼロ範疇の Spec 位置を経由して移動していると想定されている)。しかしながら、この論法は、付加語 Wh 要素、例えば *hogyan* 'how' が Wh 島内部から移動する派生を適格と予測することになる。しかしながら、(7b) の用例が示すように、付加語 Wh 要素が Wh 島内部から移動することはない (問題点)。

- (6) a. Mari **kinek** tudta hogy Péter **mitj** küldött [t_i t_j]? (Richards 1996 : (15))
 Mary-NOM who-DAT know-PAST-3SG that Peter what-ACC send-PAST-3SG
 'To whom did Mary know what Peter had sent?'
 b. Mari **mitj** tudta hogy Péter **kinek** küldött [t_i t_j]?
 'What did Mary know to whom Peter had sent?'
- (7) a. **Kinek** nem tudod hogy **hogyanj** **mitk** mondott [t_i t_k t_j]? (Puskás 2000 : p.265, (89a))
 who-DAT NEG know-PRES-2SG that how what-ACC say-PAST-3SG
 'To whom don't you know how he said what?'
 b.***Hogyanj** nem tudod hogy **kinek** **mitk** mondott [t_i t_k t_j]? (Puskás 2000 : p.265, (89b))
 how NEG know-PRES-2SG that who-DAT what-ACC say-PAST-3SG
 c. Réka **kinek** nem tudta hogy **mikorj** **mitk** hozott Péter [t_i t_k t_j]? (Puskás 1992 : (49b))
 Reka-NOM who-DAT NEG know-PAST-3SG that when what-ACC bring-PAST-3SG Peter-NOM?
 'To whom didn't Reka know what Peter had brought when?'
 d. Réka **mitk** nem tudta hogy **kinek** **mikorj** hozott Péter [t_i t_k t_j]? (Puskás 1992 : (49c))
 Reka-NOM what-ACC NEG know-PAST-3SG that when who-DAT bring-PAST-3SG Peter-NOM?
 'What didn't Reka know to whom Peter had brought when?'
 e.*Réka **kinek** **mitk** nem tudta hogy **mikorj** hozott Péter [t_i t_k t_j]? (Puskás 1992 : (49d))
 Reka-NOM who-DAT what-ACC NEG know-PAST-3SG that when bring-PAST-3SG Peter-NOM?

ここで、空範疇原理 (Empty Category Principle, ECP) を用いる Puskás (2000) の論法について考える。指示的指標をもつ項 Wh 要素は、束縛によって ECP の要請を満たす。一方、付加語 Wh 要素は、先行詞統率によってはじめて ECP の要請を満たすと想定されている。長距離移動する Wh 要素は、F あるいは C の Spec 位置を経由することなく、生成された位置から直接 matrix Spec (F) へ移動すると考えている (短距離移動する Wh 要素もまた、生成された位置から直接 embed.Spec (F) あるいは Spec (F) に左方付加した位置へ移動する)。(7a) と (7b) のそれぞれに対して、(45a) と (45b) が想定されることになる。



(45a) における項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom') は、Wh島を構成する FP 内部から抽出可能である。それは、項要素に付与された指示的指標 (*i*) による束縛が許容されるためである。一方で、付加語 Wh 要素にはこのような指示的指標は付与されないため、付加語 Wh 要素はその痕跡を先行詞統率することによって ECP の要請を満たすことができる。しかしながら、(45b) における付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') は、その痕跡を先行詞統率することはない。それは、embd.Spec

内にある Wh 要素の介在が「相対的最小原理」(Relativized Minimality Principle)に関する違反を引き起こすためである。その結果として、(45b) の派生は非文と予測されることになる。

Puskás (2000 : p.122) は、Wh 要素移動と類似の形式をとることの多い [focus] 要素が長距離移動する派生にも当てはまると主張し、以下の用例を挙げる。

- (46) a. ATTILÁVALi akarja [hogy KEDVESENj beszéljenek ti tj]. (Puskás 2000 : p.122, (107a))
 Attila-INSTR want-PRES-3SG that kindly speak-SUBJ-3PL
 'It is with Attila that she hopes that they speak KINDLY.'
- b.*KEDVESENj akarja [hogy ATTILÁVALi beszéljenek ti tj]. (Puskás 2000 : p.122, (107b))
 kindly want-PRES-3SG that Attila-INSTR speak-SUBJ-3PL
 'It is kindky that she hopes that they speak TO ATTILA.'

しかしながら、Spec (C) と Spec (F) が Wh 要素の経由点と指定されない Puskás (2000) の論法では、複数の項 Wh 要素が Wh 島内部から脱出する派生を適格と予測する。例えば上の (7e) が適格と予測されることになる。Puskás (2000 : p.269) は、この問題を派生の「経済性」(Economy) に還元する。つまり、Wh 要素の長距離移動による連鎖形成が短距離移動による連鎖形成よりもコストが高いと考える。換言すれば、matrix F に関する Wh 基準 (Wh-Criterion) は、単一の項 Wh 要素の移動による連鎖形成が最も経済的だと考える。しかし、Puskás (2000) の論法では、[-wh] CP 内部から複数の項 Wh 要素が長距離移動する本稿の (44c) が適格と予測されることになる（問題点）。それは、matrix F に Wh 要素の移動に関連する素性が付与されているため、他の派生様式との相違に基づく「経済性」によって排除されなければならないためである。

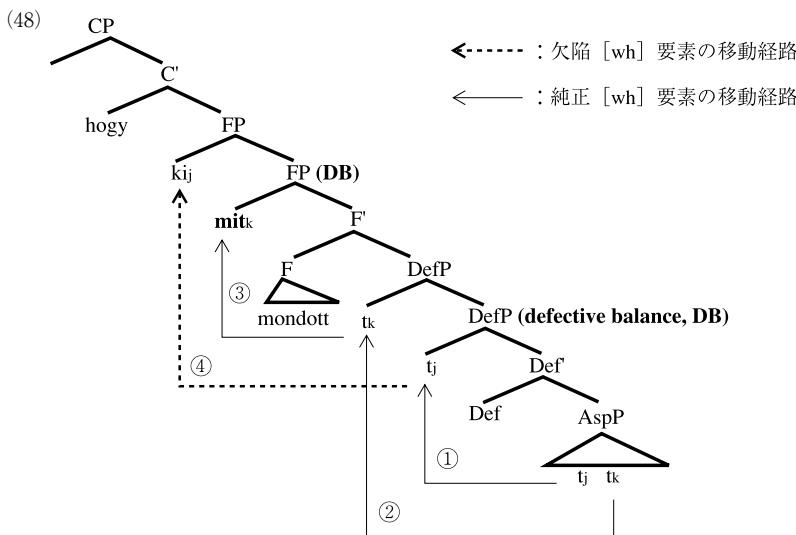
以下の用例 (47b-c) が示すように、Wh 要素と [focus] 要素が同一の FP の先端部 (Spec (F) あるいは FP に付加した位置) に生起することは許されない。¹³⁾

- (47) a. Zéta [MÉG MA]; nem tudja ti [hogy **kij** **mitk** mondott tj tk] (Puskás 2000 : p.263, (85a))
 Zéta-NOM still today NEG know-PRES-3SG that who-NOM what-ACC say-PAST-3SG
 'Zéta doesn't know EVEN TODAY who said what'
- a'. Zéta [MÉG MA]; nem tudja ti [hogy **mitk** **kij** mondott tj tk]
 b.*Zéta **mitk** [MÉG MA]; nem tudja ti [hogy **kij** mondott tj tk] (Puskás 2000: p.263, (85b))
 Zéta-NOM what-ACC still today NEG know-PRES-3SG that who-NOM say-PAST-3SG
- c.***Kit** JÁNOS szeret ti? (Bródy 1990 : (41))
 who-ACC John-NOM likes-PRES-3SG
 'Who does JOHN like?'
- d. (kíváncsi vagyok hogy) JÁNOS **kiti** vitt **fel** ti (Bródy 1990 : (39))
 (I wonder that) John-NOM who-ACC take up-PAST-3SG VM
 '(I wonder) who JOHN took up'

4. ハンガリー語における DBS (Defective Balance Strategy)

最初に、(47b-c) の非文性について考える。当該用例の非文性は、同一の F に対する素性 [*wh*] と素性 [*focus*] の同時付与が許容されないと考えることにより説明される。スペイン語における Wh 島内部からの摘出移動に関する考察の箇所で述べたように、 X^0 に付与されたある素性に関する Checking はそのゼロ範疇の Spec 位置だけでなく、当該範疇の先端部 (Spec (X) あるいは XP に付加した位置) が想定されている。よって、Spec (F) 位置に单一の要素が移動すると考える論法を想定することはできない。(47a) では、matrix F に素性 [*focus*] が付与され、embd.F に单一の素性 [*wh*] が付与されている。

ここで、(47a) の *embd.CP* 内にある複数の Wh 要素の構造について考える。ブルガリア語と同様に、ハンガリー語の多重疑問文は DBS (Defective Balance Strategy) によって生成されると想定する (ブルガリア語に対する DBS の適用例については、石岡 (2005) を参照されたい)。本稿では、特定 (Specific) 要素として機能する Wh 要素 (項 Wh 要素, D-Linked Adjunct Wh 要素と限定表現を随伴する *hány* NP (how many NP) の始発点として、ハンガリー語の CP 構造 (28) にある *Spec(Def)* が指定されると想定する (この *Spec(Def)* 位置に移動した段階で、当該要素が欠陥 [wh] 要素として機能することになる)。



(47a) に対応する派生構造 (48)において、項 Wh 要素 (*ki* 'who') が基底生成された位置と DefP の間にある最大投射の先端部を経由して Spec(Def) へ移動する (①)。次いで、純正 [wh] 要素として機能する項 Wh 要素 (*mit* 'what') が Def の先端部へ移動する (②)。FP フェイズの段階で、DBS (Defective Balance Strategy) が適用される。最初に、純正 [wh] 要素である項 Wh 要素 (*mit* 'what') が F の先端部 (Spec(F)) へ移動する (③)。次に、欠陥 [wh] 要素である項 Wh 要素 (*ki* 'who') が F の先端部 (FP に左方付加した位置) へ移動する (④)。項 Wh 要素 (*ki* 'who') の代わりに同じ項 Wh 要素 (*mit* 'what') が F の先端部へ移動する場合には、(47a') もまた、適格と予測されることになる。この予測は、本稿の (37c-d) 等によって例証される。特定 (Specific) でない Wh 要素が Spec(Def) 位置へ移動する可能性はないため、当該要素が左端に生起する多重疑問文は非文と予測されることになる。この予測は、(39b) と (40b) 等によって例証される。(41)～(43) もまた、同様に説明される。例えば (41a) では、Wh 付加語 (*melyik módon* 'in which way') が D-Linked Wh 要素である。よって当該付加語 Wh 要素が特定と解釈され、Spec(Def) へ移動可能となる (つまり、欠陥 [wh] 要素として機能することになる)。(43)においては、項 Wh 要素 (*mit* 'what') は特定 Wh 要素として機能するが、Wh 要素 (*ki a fene* 'who en earth') が特定 Wh 要素として機能する可能性はない。これにより、(43a) と (43b) の相違が説明可能となる。

それでは、本稿の (44c) の非文性はどのように説明されるのであろうか (便宜上、(44a-d) を以下に再掲する)。当該用例の非文性は、DBS が純正 [wh] 要素の始発点 (生成位置) と欠陥 [wh] 要素の始発点が共起する最小の [+Finite] CP 内において適用されると想定することにより説明される。(44c) の *embd.CP* 内において、DBS が適用されることになる。しかしながら、当該 CP 内部には素性 [*wh*] を付与された F が存在しないため、DBS が適用されないことになる。つまり、(44c) は生成不能として非文と予測されることになる (本稿の註 (7) で述べたように、DBS 適用に対する同様の規制は、スペイン語においても観察される)。

- (44) a.*Zéta gondolta [hogy Emőke **kinék** **mitj** mondott ti tj]. (Puskás 2000 : p.261, (83a))
 Zéta-NOM think-PAST-3SG that Emőke-NOM who-Dat what-ACC say-PAST-3SG
 b.*Zéta **kinék** gondolta [hogy Emőke **mitj** mondott ti tj]. (Puskás 2000 : p.261, (83b))
 Zéta-NOM who-Dat think-PAST-3SG that Emőke-NOM what-ACC say-PAST-3SG
 c.*Zéta **kinék** **mitj** gondolt [hogy Emőke mondott ti tj]. (Puskás 2000 : p.262, (83c))
 Zéta-NOM who-Dat what-ACC think-PAST-3SG that Emőke-NOM say-PAST-3SG

- d. Zéta **miti** gondolt [hogy Emőke mondott **tj**]. (Puskás 2000 : p.262, (83d))
 Zéta-NOM what-ACC think-PAST-3SG that Emőke-NOM say-PAST-3SG
 ‘What did Zéta think that Emőke said?’

(47b-c) との関連で、以下の É. Kiss による用例について考える。É. Kiss (2002 : p.91) では、Wh 要素と [focus] 要素だけでなく、*csak DP* (only DP) と否定の副詞 (*ritkán 'seldom'*) 等もまた素性 [FOCUS] をもつと考える (これらの要素は、本来的な Focus 要素と呼ばれている。本稿の素性 [focus] と区別する意味で、É. Kiss (2002) が想定する当該素性を大文字で表記する)。Spec(F) 位置に他の [FOCUS] 要素が移動していない派生において、この *csak DP* (only DP) が義務的に Spec(F) へ移動すると考えている (49)。*csak DP* (only DP) が Wh 要素と共に起する派生では、後者の Wh 要素のみが Spec(F) 位置へ移動し、他方の要素は生成位置に留まると考えている (50a, b)。否定の副詞 (*ritkán 'seldom'*) が [focus] 要素と共に起する派生では、後者の [focus] 要素のみが Spec(F) 位置へ移動し、当該副詞が生成位置に留まると考えている (51a)。(51b) と (51c) にあるように、人称代名詞 (*minket 'us'*) は、[FOCUS]([focus]) の解釈を付与されない)。*csak DP* (only DP) と否定の副詞 (*ritkán 'seldom'*) 等の特異な挙動は、どのようなプロセスによって説明されるであろうか (É. Kiss (2002) では、これに関する言及が見あたらない。本稿では、*csak DP* (only DP) と否定の副詞 (*ritkán 'seldom'*) 等を特異要素と呼ぶことにする)。

- (49) a.*János be mutatta CSAK PÉTERT Marinak (É. Kiss 2002 : p.90, (34a))
 John-NOM VM introduce-PAST-3SG only Peter-ACC Mary-DAT
 ‘John introduced only Peter to Mary’
 b. János CSAK PÉTERT mutatta be Marinak (É. Kiss 2002 : p.90, (34b))
 c.*János meg oldja a házi feladatot RITKÁN. (É. Kiss 2002 : p.90, (37a))
 John-NOM VM solve-PRES-3SG the home work-ACC seldom
 ‘John seldom does the homework’
 d. János RITKÁN oldja meg a házi feladatot. (É. Kiss 2002 : p.90, (37b))
- (50) a. **Ki** láitta CSAK PÉTERT? (É. Kiss 2002 : p.92, (43a))
 who-NOM see-PAST-3SG only Peter-ACC
 ‘Who saw only Peter?’
 b.*CSAK PÉTERT láitta **ki**? (É. Kiss 2002 : p.92, (43b))
 only Peter-ACC see-PAST-3SG who-NOM
 c. **Melyik** félévben kapott CSAK HÁROM LÁNY CSAK KÉT TÁRGYBÓL jelest? (É. Kiss 2002 : p.92, (42a))
 which term-INNESS receive-PAST-3SG only three girl-NOM only two subject-ELAT A+-ACC
 ‘In which term was it only three girls who received an A+ only in two subjects?’

- (51) a. MINKET hív fel Péter RITKÁN. (É. Kiss 2002 : p.93, (44a))
 we-ACC call-PRES-3SG VM Peter-NOM seldom
 'It is us than Peter calls up seldom.'
- b. RITKÁN hív fel minket Péter. (É. Kiss 2002 : p.93, (44b))
 seldom call-PRES-3SG VM we-ACC Peter-NOM
 'It is seldom than Peter calls us up.'
- c.*RITKÁN hív fel MINKET Péter. (É. Kiss 2002 : p.93)
- d. CSAK MARI kapott CSAK KÉT TÁRGBÓL jelest. (É. Kiss 2002 : p.91, (41a))
 only Mary-NOM get-PAST-3SG only two subject-ELAT A+-ACC
 'It was only Mary who got an A+ only in two subjects.'
- e. CSAK KÉT TÁRGBÓL kapott CSAK MARI jelest. (É. Kiss 2002 : p.91, (41b))
 'It was only two subjects in which Mary got an A+'.

これら特異要素が示す挙動は、以下のように説明されるであろう。特異要素は、それが生成される CP 内の F に素性 [*focus*] が付与された場合、当該 F からそれぞれ素性 [focus] を付与される (F に素性 [*wh*] を付与された場合には、当該 F から素性 [wh] を付与される)。これにより、(49a, c) の非文性と (49b, d) の適格性が説明される。(50) では、F に素性 [*wh*] が付与される (特異要素に、素性 [wh] が付与されることになる)。本来の素性 [wh] を付与された Wh 要素 (*ki* 'who', *melyik félévben* 'in which term') も生起する。素性 [wh] をもつ要素が複数生起する派生において、F から当該素性を付与された特異要素が純正 [wh] 要素として機能すると考える (本来の Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として機能する)。F に素性 [*focus*] が付与される (51) でも同様である。本来の素性 [focus] を付与された人称代名詞 (*minket* 'us') が欠陥 [focus] 要素として振る舞う。F から素性 [focus] を付与された特異要素 (*ritkán* 'seldom') が純正 [focus] 要素として機能すると考える。DBS が適用された結果 (50a, b) と (51a, c) に対して、それぞれ (52a, b) が想定されることになる (純正素性をもつ要素が欠陥素性をもつ要素に先だってフェイズ先端部へ移動する点に留意されたい)。

- (52) a. ... [FP *kii* [FP [CSAK PÉTERT]_j [DefP ... [TP *tí* *tk*]]]]
 b. ... [FP MINKET_i [FP [RITKÁN]_j [DefP ... [TP *tí* *tk*]]]]

ここで、DBS の適用を受けて生成された欠陥 Wh 要素あるいは欠陥 [focus] 要素が移動先で発音されると考えてみよう (純正 Wh 要素、あるいは純正 [focus] 要素がその元位置 (in-situ) で発音されると考える)。これにより、(50) と (51) の用例すべてが説明可能となる。(51d, e) では、それぞれ左端の要素 (*csak Mari* 'only Mary', *csak két trágol* 'in two subjects') が特異要素として機能していない (通常の DP として用いられ、欠陥 [focus] 要素として機能している) (上で述べ

た発音位置に関する仮説が特異要素が生起する派生に対して想定されている点に留意されたい)。¹⁴⁾

次に、Wh 島内部からの移動について考える。スペイン語の並行事象に対して想定したように、DBS の適用によって生成された構造で最上位の欠陥 [wh] 要素のみが Wh 島内部から脱出可能と考える (スペイン語とハンガリー語では、それぞれ CP フェイズと FP フェイズが関与するが)。つまり、特定 (Specific) と指定される单一の Wh 要素が、Wh 島内部から移動可能と予測される (これは、ハンガリー語の多重疑問文の派生構造と並行するものである)。これにより、本稿の (6a-b) が共に適格と予測されることになる (双方の Wh 要素が、特定と指定される)。同様に、以下の (53a) もまた適格と予測される。(53b) は、不適格と予測される。¹⁵⁾

- (53) a. [FP **Kiti** ne tudsz [CP ti hogy **mikor** vizsgázik ti tj]]? (É. Kiss 2002 : p.254, (64a))
 who-Acc NEG know-PRES-2SG that when sit.for.exam-PRES-3SG
 'Whom don't you know when (he) sits for the exam?'
 b.* [FP**Mikor/Hogyan/Miért/Holj** ne tudsz [CP hogy **ki** vizsgázik ti tj]]?
 when/how/why/where NEG know-PRES-2SG that ki-NOM sit.for.exam-PRES-3SG

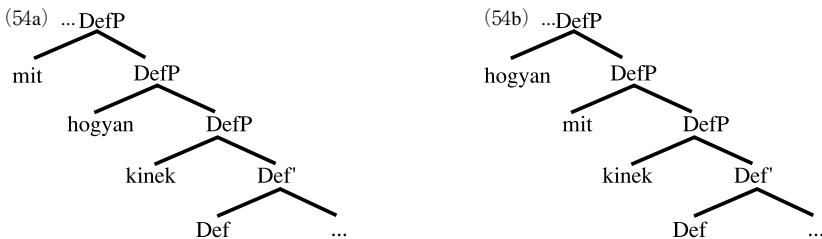
この予測の妥当性は、この場合 Wh 要素移動と類似のプロセスをとると考えられる [focus] 島内部からの移動用例 (46) によって例証されるであろう (このことは、本稿の第 5 節でも間接的ではあるが例証される)。

(7) の用例に対しても、適切な説明が可能となる。(7b) と (7e) が不適格と予測されることになる。(7b) では、付加語 Wh 要素 (*hogyan 'how'*) が不特定であるため、Spec (Def) 位置へ移動して欠陥 [wh] 要素として機能することはない。後述するように、DBS の適用によって生成された DefP 構造において、より上位の欠陥 [wh] 要素が下位の欠陥 [wh] 要素に先だって F の先端部へ移動すると考える。つまり、当該付加語 Wh 要素が長距離移動する派生は非文 (不適格) と予測される。Wh 島外部に移動可能な要素として、DBS 構造で最上位の欠陥 [wh] 要素が指定されると想定されているため、(7e) もまた非文と予測される。

次に、特定と指定される Wh 要素が Spec (Def) へ移動する派生について考える。最初に、付加語 Wh 要素 (*hogyan 'how'*) が純正 [wh] 要素として機能する派生について考える (この場合、2 つの項 Wh 要素の双方が欠陥 [wh] 要素として機能する)。この派生では、2 つの項 Wh 要素の一方が FP フェイズに生成される DBS 構造の最上位に位置し、Wh 島外部へ移動することになる (項 Wh 要素 (*kinek 'to whom'*) が Spec (Def) へ移動する (54a) の DefP 構造で考える)。項

Wh 要素 (*kinek* 'to whom') が Spec(Def) へ移動した後に、純正 [wh] 要素として機能する付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') が DefP に左方付加した位置へ移動する。次いで、項 Wh 要素 (*mit* 'what') が DefP に左方付加した位置へ移動する。FP フェイズの段階で、最初に純正 [wh] 要素である付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') が F の先端部 (Spec(F)) へ移動する。DBS の適用によって生成された DefP 構造において、より上位の欠陥 [wh] 要素が下位の欠陥 [wh] 要素に先だって F の先端部へ移動すると考える。これによって生成されるのは、(7d) と以下の (54d, e) のような embd. CP 内部の語順が [項 Wh + 付加語 Wh] となる派生である。

付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') が欠陥 [wh] 要素として機能する派生では、2 つの項 Wh 要素の一方が欠陥 [wh] 要素として機能する。残りの項 Wh 要素が純正 [wh] 要素として機能する。例えば項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom') が Spec(Def) へ移動して、欠陥 [wh] 要素として機能する派生で考える（他方の項 Wh 要素 (*mit* 'what') が純正 [wh] 要素となる）。これは、(54b) の DefP 構造によって示される。



最初に、欠陥 [wh] 要素として機能する項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom') が Spec(Def) へ移動する。次いで、純正 [wh] 要素として機能する項 Wh 要素 (*mit* 'what') が DefP に左方付加した位置へ移動する。次に DefP に左方付加した位置へ移動するのが、欠陥 [wh] 要素として機能する付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') である。FP フェイズの段階で、最初に純正 [wh] 要素 (*mit* 'what') が F の先端部 (Spec(F)) へ移動する。次に、(*hogyan* 'how') が F の先端部 (FP に左方付加した位置) へ移動する。最後に、もう一方の欠陥 [wh] 要素 (*kinek* 'to whom') が F の先端部へ移動することになる。結果として、DBS の適用によって生成された FP 構造の最上位にある項 Wh 要素 (*kinek* 'to whom') が Wh 島内部から移動可能となる。この派生によって生成するのは、(54c) として再掲される (7a) と

(54f) として再掲される (7c) のような embd. CP 内部の語順が [付加語 Wh + 項 Wh] となる派生である (当該付加語 Wh 要素が Wh 島外部へ移動することはない)。 (54f) に対応して対格 Wh 要素 (*mit* 'what') が Spec(Def) へ移動して欠陥 [wh] 要素として機能する派生もまた適格と予測される。この予測の妥当性は、本稿の (7d) によって例証される (当該用例を (54g) として再掲する) (embd.CP 内において付加語 Wh 要素 (*mikor* 'when') と与格要素 (*kinek* 'to whom') の位置が逆転した派生もまた、適格と予測されることになる)。¹⁶⁾

- (54) c. **Kinek**: nem tudod hogy **hogyan** **mit**: mondott [tí tk tj]? (Puskás 2000 : p.265, (89a)) (= (7a))
 who-DAT NEG know-PRES-2SG that how what-Acc say-PAST-3SG
 'To whom don't you know how he said what?'
- d. **Kinek**: nem tudod hogy **mitk** **hogyan** mondjál [tí tk tj]? (Puskás 1992 : (63a))
 who-DAT NEG know-PRES-2SG that what-Acc how say-PAST-3SG
- e. **Kinek**: nem tudsz hogy **mitk** **mikor** mondott [tí tk tj]? (Puskás 2000 : p.270, (95a))
 who-DAT NEG know-PRES-2SG that what-ACC when say -PAST-3SG
 'To whom don't you know when he said what?'
- f. Réka **kinek** nem tudta hogy **mikor** **mitk** hozott Péter [tí tk tj]? (Puskás 1992 : (49b)) (= (7c))
 Reka-NOM who-DAT NEG know-PAST-3SG that when what-ACC bring-PAST-3SG Peter-NOM?
 'To whom didn't Reka know what Peter had brought when?'
- g. Réka **mitk** nem tudta hogy **kinek** **mikor** hozott Péter [tí tk tj]? (Puskás 1992 : (49c)) (= (7d))
 Reka-NOM what-ACC NEG know-PAST-3SG that when who-DAT bring-PAST-3SG Peter-NOM?
 'What didn't Reka know to whom Peter had brought when?'

以下の用例もまた、適格に説明可能となる。既に述べたように、matrix F に複数の Wh 要素が生起する (44c) の非文性は、DBS が純正 [wh] 要素の始発点 (生成位置) と欠陥 [wh] 要素の始発点が共起する最小の [+Finite] CP 内において適用されると想定することにより説明された。つまり、(55) において DBS が適用されるのは CP2 内部においてである。通常、関係詞 Wh 要素は D-Linked Wh として振る舞うと考えられる (つまり、関係代名詞 (*akinek* 'to whom') は特定 (Specific) と指定される)。これにより、(55a) の適格性が説明される (Spec(Def) へ移動するため、当該関係代名詞の長距離移動が可能となる)。素性 [*wh*] が CP1 の F に付与されているため、(55b) は非文と予測される (CP2 内部で DBS が適用される必要があるが、当該 CP 内の F には素性 [*wh*] が付与されていない)。

- (55) (Horváth 1986 : p.226, (7a); (7b))

- a. Ez volt az a fiú [**akinek**i a gyerekek mondta [CP1 hogy Péter kérdezte [CP2 hogy Mari **mitk** küldöt [tj tí]]]]
 this be-Past-3SG that the boy-NOM who-DAT the children-NOM say-PAST-3PL that Peter-NOM ask-PAST-3SG that Mary-NOM what-ACC send-PAST-3SG

‘This was the boy to whom the children said Peter asked what Mary had sent’

- b.*Ez volt az a fiú [akinek_i a gyerekek [cp₁ hogy Péter mit_j mondott [cp₂ hogy Mari küldöt [t_j ti]]]]]
 this be-Past-3SG that the boy-NOM who-DAT the children-NOM ask-PAST-3PL that Peter-NOM
 what-ACC say-PAST-3SG that Mary-NOM send-PAST-3SG
 ‘This was the boy to whom the children asked what Peter said Mary had sent’

5. 結び

本稿において、ハンガリー語における多重疑問文と Wh 島内部からの移動事象が DBS (Defective Balance Strategy) によって説明可能であることが示されたと思われる。しかしながら、Wh 要素と [focus] 要素が共起する以下の (56) と (57) の用例は、本稿の仮説群に対して問題を提起するようにみえる。

- (56) a. **Kivel** gondolsz hogy ZÉTA beszélt? (Puskás 2000 : p.266; (90a))
 who-INSTR think-PRES-2SG that Zéta-NOM speak-PAST-3SG
 ‘With whom do you think that ZÉTA spoke?’
- b.***Hogyan** gondolsz hogy ZÉTA beszélt? (Puskás 2000 : p.266; (90b))
 how think-PRES-2SG that Zéta-NOM speak-PAST-3SG
 ‘How do you think that ZÉTA spoke?’
- (57) a. ZÉTÁVAL voltam kiváncsi hogy **ki** beszélt. (Puskás 2000 : p.266; (91a))
 Zéta-INSTR be-PAST-1SG curious that who-NOM-PAST-3SG
 ‘I wondered who spoke with ZÉTA’
- b.*GOROMBÁN voltam kiváncsi hogy **ki** beszélt. (Puskás 2000 : p.266; (91b))
 rudely be-PAST-1SG curious that who-NOM-PAST-3SG
 ‘I wondered who spole RUDELY’

(56) では、matrix F に素性 [*wh*] が付与される (embd.F に素性 [*focus*] が付与される)。(57) では、matrix F に素性 [*focus*] が付与される (embd.F に素性 [*wh*] が付与される)。同一の F に素性 [*wh*] と素性 [*focus*] が同時付与されることはないと前提されている。しかしながら、この前提によって (56) と (57) で観察される相違を説明することはできない (問題点)。この問題は、DBS の適用に際して、長距離移動する Wh 要素と [focus] 要素にとって、素性 [*wh*] と素性 [*focus*] が非示差的 (Non-Distinctive) であると考えることにより打開されると思われる。これにより、特定 (Specific) と指定される項 Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として機能する (56a) は、適格と予測されることになる。付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how') が長距離移動する派生は、非文と予測される。このことは、(57) においても同様である (項要素が長距離移動する (57a) が適格と予測される)。

さらに、Horváth (1986) が挙げる用例もまた、問題を提起するようにみえる。

既に述べたように、matrix F に複数の Wh 要素が生起する (44c) の非文性は、DBS が純正 [wh] 要素の始発点（生成位置）と欠陥 [wh] 要素の始発点が共起する最小の [+Finite] CP 内において適用されると想定することにより説明された。具体的には、(58) の CP3 内部で DBS が適用されることになる。(58a) と (58b) の双方が、非文と予測されることになる（問題点）。

(58) (Horváth 1986 : p.225, (5a) ; (5b))

- a. [János **melyik fiúnak**_i kérdezte [CP₁ hogy **kij** tudja **tj** [CP₂ hogy a házigazda [CP₃ **kitk** mutatott **be** [t_i t_k]]]]?

 - John-NOM which boy-Dat ask-PAST-3SG that who-NOM know-PRES-3SG that the host-NOM who-ACC show-PAST-3SG VM
 - ‘To which boy did John ask who knew whom the host had introduced?’

- b. [János **ATTILÁNAK**_i kérdezte [CP₁ hogy **kij** tudja **tj** [CP₂ hogy a házigazda [CP₃ **kitk** mutatott **be** [t_i t_k]]]]?

 - John-NOM Attila-DAT ask-PAST-3SG that who-NOM know-PRES-3SG that the host-NOM who-ACC show-PAST-3SG VM
 - ‘It is Attila to whom John asked who knew whom the host had introduced’

ここで、(58)において、長距離移動する要素が D-Linked Wh 要素である点に留意する必要がある。ここで、以下のように考えてみよう。一般的に、DBS は純正 [wh] 要素の始発点（生成位置）と欠陥 [wh] 要素の始発点が共起する最小の [+Finite] CP に適用され、かつその適用が 1 回に限定されると想定してみよう。D-Linked Wh 要素（と [focus] 要素）では、DBS の適用回数の制限が関与しないと考える。これにより、(58a-b) の双方が適格と予測されることになる（(58b)において、長距離移動する [focus] 要素 (*Attilának* 'to Attila') にとって、素性 [*wh*] と素性 [*focus*] が非示差的（Non-Distinctive）であると考えている点に留意されたい）。¹⁷⁾

註

- 0) 本稿の Anonymous Reviewer から本稿が立脚する理論上の問題点と論文構成上の不備と思われる箇所、さらにハンガリー語の綴り字に関する誤りの指摘をいただいた。ここに、謝意を表する次第です。
- 1) その最も深く埋め込まれた CP 内に二重目的語構文が生起する (7a-e) において、当該構文と関連する〔与格要素+対格要素〕と付加語要素の生成位置関係は仮のものである。〔与格要素+対格要素〕の相対語順を示す以下の (ia) と (ib) は非常に興味深い。
 - (i) (Kenesi, István, Róbert M. Vago and Anna Fenyvesi 1998 : p.146, (421a) ; Wunderlich 2002 : (10))
 - a. bermutattam egymásnak a fiúkat.
VM-introduce-PAST-1SG each other-DAT the boys-ACC

- ‘I introduced the boys to each other.’
- b. mutattam a lánynak egy fényképet magáról.
 show-PAST-1SG the girl-DAT a photo-ACC REFL-3SG-DEL
 ‘I showed the girl a photo of herself.’

(ia) は、対格要素 (*a fiúkat*) が与格要素である照応形 (*egymásnak*) を C 統御することを示す。その一方で、(ib) では、与格要素 (*a lánynak*) が対格要素内部にある照応形 (*magáról*) を C 統御する必要がある（ハンガリー語における二重目的語構文に関しては、稿を改めて検討する）。

[+Finite] CP である Wh 島内部からの Wh 要素の移動が基本的に排除される英語の話者グループも存在する。つまり、この話者グループにおいては、(2a) は (1a) と (2b-d) よりも認容度が高くなる傾向が認められるが、基本的に不適格と判断される（この意味で、Chomsky (2000, 2001) の PIC が適確な予測をもたらす）。換言すれば、当該話者グループにおいては、本稿で提唱される欠陥バランス戦略 (Defective Balance Strategy) が適用されないことになる。この欠陥バランス戦略が適用されるのは、(2a) と (3a, c, d) のタイプを本質的に適格と判断する話者グループにおいてである。さらに本稿の (25) の判断を下す話者グループの詳細を調査する必要がある。

(4) と (5) にあるスペイン語の用例からもわかるように、当該言語の状況は、対応する英語の状況とは異なるものである。一律に Wh 島内部からの移動が排除されるのではなく、一定の構造条件を満たす場合に限り、Wh 島内部からの項 Wh 要素の移動が許容される。スペイン語の用例において、文頭と文末に疑問符が付される点に留意されたい（文頭の疑問符は、反転形 (*ü*) で用いられる）。文頭の反転疑問符 (*i*) と、文法性判断の疑問符 (? , ??*) の相違に注意されたい。

ブルガリア語の多重疑問文に対する DBS の適用に関しては、石岡 (2005) を参照されたい。

- 2) PIC-1 に関する記述の概略は、Ishii (2000) による（詳細は、当該論文を参照されたい）。英語とスペイン語では、同一の CP 内においてすべての Wh 要素が左方移動する多重疑問文 (Multiple Question) が許容されない。これは、当該言語において多重 Spec (Multiple Spec) 構造が存在しないことを物語ると考えられる (Ishii 2000 : p.321)。これにより、(1a) の派生に対応する構造 (10c) において、embd.C の先端部 (Edge) に二つの Wh 要素が生起することはない ((1a) と (1b) が生成不能として、不適格と予測される)。
- 本稿でも、(10c) に類似する embd.CP への付加移動を想定する。後述するように、この付加移動の引き金は embd.CP フェイズ内にあると考えられる。
- 3) ある派生が違反不可能である制約 (Feature Condition, SCC, PIC-2 と後述する句バランス (Phrase Balance)) を満たす唯一の方法である場合に限り、当該派生において最終手段 (LR) 違反が許容されると想定される (Müller 2004 : p.298)。この場合に限り、素性の一致によらない先端部への移動が可能となると考えている。
- 4) この箇所では、従来の Spec (AgrO) (本稿では、Spec (Agr-DO) と表記する) を v の外部 Spec 位置と見なしている。本稿では、主語要素がその Spec 位置に生成される v よりも上位の位置に Agr-DO の投射が生成されると考えている。
- 5) D-Linked Wh 要素が関与する優位条件については、本稿の第 2 節で検討する
- 6) 各フェイズにおいて、純正 [wh] 素性を付与された要素の移動が欠陥 [wh] 素性を付与された要素のそれに先行すると想定する。二つの Wh 要素が生起する派生においては、欠陥 [wh] 要素として機能する Wh₁ の生成位置 (XP フェイズの先端部、あるいは X' に付加した位置) に関わりなく、純正 [wh] 素性を付与された Wh₂ が XP フェイズの先端部を経由して Spec (C) へ移動し、Wh₂ が CP に左方付加した位置へ移動する。これにより、CP フェイズの先端部における Wh 要素の相対語順 [Wh₁+Wh₂] が確保される。本稿では、派生が XP フェイズに到達した段階で XP フェイズ内部に生成された欠陥 [wh] 要素が当該フェ

イズの先端部に生起、あるいは先端部に移動すると考える (X' に付加した位置に生成された欠陥 [wh] 要素が $\text{Spec}(X)$ へ移動すると考える)。つまり、純正 [wh] 素性を付与された Wh_2 は、 XP に左方付加した位置を経由して $\text{Spec}(C)$ へ移動する。次いで、 Wh_1 がその先端部 ($\text{Spec}(X)$ あるいは XP に付加した位置) から CP に左方付加した位置へ移動する (XP と YP などの最大投射の間にあるフェイズでも同様)。

- (i) a. $[\text{CP} \dots [XP \dots Wh_1 \dots [YP \dots Wh_2 \dots]]]$
- b. $[\text{CP} \dots [XP \dots Wh_1 \dots [YP \dots Wh_2 \dots [zp \dots Wh_3 \dots]]]]$

3つの Wh 要素が生起する (ib) の XP フェイズの派生段階において、欠陥 [wh] 要素 (Wh_2 と Wh_1) は共に XP の先端部にある (Wh_2 が Wh_1 よりも上位にある)。フェイズが上位の最大投射 (HP) に移った段階で、純正 [wh] 素性を付与された Wh_3 が当該フェイズの先端部へ移動する。次いで、欠陥 [wh] 要素 (Wh_2 と Wh_1) が HP フェイズの先端部 (HP に左方付加した位置) へ移動する。 $[Wh_2 \rightarrow Wh_1]$ の順に左方付加移動が最終フェイズである CP まで繰り返されると前提する。最終の CP フェイズにおいて、純正 [wh] 要素 (Wh_3) が $\text{Spec}(C)$ へ移動し、欠陥 [wh] 要素が $[Wh_2 \rightarrow Wh_1]$ の順で CP に左方付加した位置へ移動する (これにより、 $[Wh_1 + Wh_2 + Wh_3]$ の相対語順が形成されることになる。後述するように、ハンガリー語では、(ia-b) における最大投射 CP が最大投射 FP によって置き換えられる。また、2つの要素が欠陥 [wh] 要素となる (ib) において、 Wh_1 がその1つである。もう一方の欠陥 [wh] 要素となるのは、その生成位置に関係なく、 Wh_2 と Wh_3 のどちらでも構わない (後述の予定)。

- 7) 後述するように、ハンガリー語では、各フェイズのバランス確保のための移動によって形成される複合連鎖の最終移動先で発音される。この欠陥バランス戦略 (DBS) が完結するフェイズ (FP) において、欠陥 [wh] 素性と純正 [wh] 素性の置き換えが適用される。つまり、当該フェイズの最上位 (左端) にある Wh 要素のみに純正 [wh] 素性が付与される。Kayne (1983: fn.13) が指摘するように、ある特定の話者グループにおいて、D-Linked Wh 要素が生起した派生においても優位条件が遵守される。

- (i) a.*?I want to know what book which students took home with him. (Kayne 1983: fn.13)
- b.*?The police are trying to figure out which taxi which robber got into. (Kayne 1983: fn.13)

(21A-a)において、DO Wh 要素 (*which books*) の始発点として $\text{Spec}(v)$ よりも上位の $\text{Spec}(\text{Agr-DO})$ が指定される派生に対して、どのような予測がなされるか。 $\text{Spec}(\text{Agr-DO})$ 位置にある Wh 要素 (*which books*) が欠陥 [wh] 要素として機能する (主語 Wh 要素は、純正 [wh] 素性が付与される)。欠陥 [wh] 要素が元位置 (この場合、DO の生成位置) で発音されると想定されている点に留意されたい)。つまり、この場合の派生の出力として、(21A-d) が指定されることになる。DO Wh 要素に対してより上位である $\text{Spec}(\text{Agr-DO})$ がその始発点として指定される派生における DBS は、義務的に適用されると考える必要がある。DBS が適用されないと考えた場合には、(21A-a) が適格と予測されることになる (仮に、その生成位置が始発点と指定される Wh 要素に対してのみ PIC-2 が適用可能であると考える)。

一方、スペイン語では、優位条件が適用されないように見える。仮に、スペイン語の Non-D-Linked Wh 要素にも欠陥 [wh] 素性が付与可能と考える (スペイン語において、DBS が適用された場合の主語要素と目的語要素の始発点として、それぞれの生成位置が指定される。定動詞は、T 位置で発音される。欠陥 [wh] 要素の発音位置として、その元位置 (生成位置) が指定される)。後述するように、スペイン語の Wh 島内部からの Wh 要素移動の事例においても、Non-D-Linked Wh 要素が欠陥 [wh] 要素として振る舞うと想定する。

- (ii) a. Juan sabe quién dijo qué (Jaeggli 1982)
 John knows who said what
 'John knows who said what.'
- b. Juan sabe qué dijo quién (Jaeggli 1982)
 'John knows what who said'
- c. ι [A quién] envió quién regalos? (Bošković 1997: fn.22)
 [to whom] sent who presents
 'Who sent presents to whom?'

しかしながら、(iii) の用例では優位条件が適用されている。これは、スペイン語における DBS の適用は純正 [wh] 要素が生成される最小の [+Finite] CP 内に限定されると想定することにより説明される（純正 [wh] 要素と欠陥 [wh] 要素の始発点が同一の最小 [+Finite] CP 内にある場合に、DBS が適用可能となる）。

- (iii) a. ι Qué dijó quién que Juan compra ti? (Bošković 1997: fn.22)
 what said who that Juan buys
 'What did who say that Juan buys?'
 b. ι Qué le ha pedido [a quién] que compre ti? (Hornstein 1995: p.142, (73a))
 what CL (him) has asked whom that buy-Subjunctive
 'What has she asked whom to buy?'

8) ここで、ミニマリストプログラムの観点からスペイン語における Wh 制約を説明しようとする Sabel (2002) が引き起こす問題点に言及する。多重 Spec (C) が前提され、長距離移動する Wh 要素は、Wh 島を形成する C のより外部の Spec 位置を経由する。この Spec 位置にある中間痕跡が演算子 (Operator) を構成しないため、当該痕跡は $*_t$ と標示される（適切な派生が生成するためには、この中間痕跡 ($*_t$) が削除される必要がある）。この削除が適切に適用されるためには、この中間痕跡が演算子－変項連鎖 (Operator-Variable Chain) の内部にある必要がある (Uniform Chain の内部では、この中間痕跡の削除が適用されない)。演算子－変項連鎖は、以下の (ia-b) の双方の条件を満たす必要がある。

- (i) a. $A' \dots (A') \dots A$ (Sabel 2002: (16))
 b. $\theta' \dots (\theta') \dots \theta$

ドイツ語とオランダ語においては、主語 Wh 要素、直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素の始発点として、 θ' 位置が指定される。結果として、当該言語における主語 Wh 要素、直接目的語 Wh 要素と付加語 Wh 要素が Wh 島内部から移動する派生は排除される)。スペイン語とイタリア語においては、主語 Wh 要素の始発点が θ 位置と指定される点を除き、ドイツ語（オランダ語）と同じ状況で想定される (Sabel 2002: p.282)。これにより、(ii) の用例が説明される (Sabel (2002) は、Jaeggli (1988) から (iia) を引用している)。主語 Wh 要素が Wh 島内部から移動可能となる。Sabel (2002) の理論からすれば、その始発点として θ 位置が指定される項としての PP (例えば、間接目的語 Wh 要素) もまた、Wh 島内部から移動可能と予測される。これは、本稿の (5a) の Torrego (1984) が提供するスペイン語の用例によって示される（便宜上、(5a) を (iiia) として以下に再掲する）。しかしながら、Jaeggli (1982) は、(5a) と同じタイプの用例である (iiib) を不適格と判断する ((iiib) は、本稿の (23a) に対応する)。つまり、Sabel (2002) の論法は、スペイン語における話者グループごとの相違を説明できない。既に述べたように、直接目的語 Wh 要素が Wh 島内部から移動する (iia) が不適格と判断される。その一方で、Sabel (2002) は、それに対応する再述接語 (Resumptive Clitic) を随伴する直接目的語 Wh 要素が Wh 島内部

から移動する用例 (iiic) の適格性を説明できない ((iiic) は本稿の (24b) に対応する)。本節において、話者グループごとの相違と (iiic) の適格性を説明する論法が提示する。

- (ii) a.**¿Qué* no sabes quién compró *t* *t*? (Sabel 2002 : (13a))
 ‘What don't you know who bought?’
 - b.**¿Qué* [Por *qué*] no sabes qué comprar *t* *t*? (Sabel 2002 : (13b))
 ‘Why don't you know what to buy?’
 - c.*¿Quién* no sabes *qué* compró *t* *t*? (Sabel 2002 : (13c))
 ‘Who don't you know what bought?’
- (iii) a.*¿A quién* [A *quién*] dices que no te acuerdas qué *le* has dicho *t* *t*? (Torrego 1984 : (54a))
 ‘To whom do you say that you don't remember what you have said?’
 - b.**¿A quién* [A *quién*] no sabias qué *le* regalaron *t* *t*? (Jaeggli 1982 : p.170, (4-151b))
 ‘To whom don't you know what they had given?’
 - c.*¿Qué libro* [A *qué libro*] no sabes *qué* *lo* compró *t* *t*? (Contreras 1992 : (11b))
 ‘What book don't you know who bought it?’

- 9) 一般的に DBS が適用される場合、いかなる Wh 要素でも純粹 [wh] 要素として機能する。後述するように、ハンガリー語の非指示的付加語 Wh 要素 (*hogyan* 'how', *miért* 'why') が純粹 [wh] 要素として機能する。その一方で、英語における非指示的付加語 (how, why) が、少なくとも優位条件が関与する派生において純粹 [wh] 要素として機能しない話者グループ存在が確認される。この話者グループにおいて、付加語 Wh 要素 (how, why) の始発点 (生成位置) は、主語 Wh 要素の始発点 (始発点) よりも上位に指定されると思われる (当該付加語要素が vP よりも上位にある最大投射に右方付加した位置に生成されると考える)。主語 Wh 要素の始発点は、直接目的語 Wh 要素の始発点よりも上位に指定される。つまり、付加語 Wh 要素 (how, why) の始発点が主語 Wh 要素と直接目的語 Wh 要素の始発点よりも上位に指定されることになる)。これにより、DBS が適用されない (i) と (ii) の用例の説明が可能となる。非指示的付加語 Wh 要素 (how, why) が純正 [wh] 要素として機能しないと考えると、(ia-c) と (iia-b) のすべてが生成不能となる。その一方で、D-Linked Wh 要素である非指示的付加語が純正 [wh] 要素として機能すると想定すると、(iic-d) の適格性が導出される。DBS が適用されると考えられる (iii) の用例は、D-Linked Wh 要素である非指示的付加語が欠陥 [wh] 要素として機能する派生として説明される (欠陥 [wh] 要素として機能する要素がその元位置で発音されると仮定している点に留意されたい)。
- (i) a.*Who left why? (Kuno and Takami 1993 : p.88, (43b))
 b.*Who did how? (Kuno and Takami 1993 : p.88, (43c))
 c.*I wonder why **which man** came. (Hornstein 1995 : p.148, (98a))
 - (ii) a.*What did Bill buy why? (Hornstein 1995 : p.147, (95a))
 b.*Why did Bill buy what? (Hornstein 1995 : p.147, (95b))
 c. **For what reasons** did you buy what? (Kuno and Takami 1993 : p.116, (118a))
 d. **In what manner** did you do what? (Kuno and Takami 1993 : p.116, (118b))
- (iii) Tell me who came **for what reasons**. (Kuno and Takami 1993 : p.120, (130b))

- 10) TopP と FP の間に種々の数量詞がその Spec 位置へ移動する QP の投射を想定する必要がある。例えば普遍数量詞 (*mindenki* 'everybody-NOM', *mindenkinek* 'everybody-DAT' 等), *sok* 'many', *számos* 'several' などによって導入される数量詞は、(28) の TP 内部から QP の Spec 位置へ移動可能である。その一方で, *valaki* 'somebody', *valami* 'something' 等は, Spec (Top) あるいは TP 内部で用いられる (cf. É Kiss 2002 : p.106)。今回の論考では、これらの Quantifier が直接関与することがないため、詳細な論考は割愛する (Asp の直接上位に生成される否定 (Neg (ation)) の投射の表示も省略されている)。また、TP 内部の構造に関する論考も割愛する。これ以降、Spec (Asp) に生成される VM は二重下線付きの太字で表記する。
- 11) 仮に、(34d) 中の主語要素 (*János*) が DefP に左方付加する (Def の先端部 (Edge) 移動する) と考える。また、付加語 (*nagyon* 'very') が TP 内部あるいは AspP に左方付加した位置に生成されると考えると、以下の用例も適切に説明可能となる。(id) は、定動詞が F 位置に移動していない (F 位置で発音されていない) ため、非文 (非文法的) と予測される。(ib) では、当該付加語が TP 内部に生成される。
- (i) a. [TopP *János* ... [AspP *nagyon* [AspP el *szomorodott* [TP *ti...*]]]]. (É. Kiss 2002 : p.85, (21a))
 John-NOM very VM sadden-PAST-3SG
 'John became very sad'
 b. [TopP [FP *JÁNOSi* *szomorodottj* [AspP el *ti* [TP *ti* *nagyon...*]]]]. (É. Kiss 2002 : p.85, (21c))
 'It was John that became very sad'
 c. [TopP [FP *JÁNOSi* *szomorodottj* [AspP *nagyon* [AspP el *ti* [TP *ti* ...]]]]].
 (É. Kiss 2002 : p.85, (21d))
 d. * [TopP [FP *JÁNOSi* [AspP *nagyon* [AspP el *szomorodott* [TP *ti* ...]]]]].
 (É. Kiss 2002 : p.85, (21d))
- 12) その生起が非常に稀で、同時にその使用がかなり限定されているが、(37b) が許容される場合がある。それは、單一返答 (Singular Answer) を要求する疑問文である (詳細は、É. Kiss (1993, 2002) 等を参照されたい)。例えば、(ia, b) の返答として、(ic) が期待される (Lipták (2002))。 (ia, b) における Wh 要素 (*kit*) と (ic) における Focus 要素 (*MARIT*) については、稿を改めて検討する。
- (i) a. **Ki** hívott **meg** tegnap a moziba **kit**? (Lipták 2002 : (12a))
 who-NOM invite-PAST-3SG VM yesterday to the cinema-ILL who-ACC
 'Who invited whom to the cinema yesterday?'
 b. **Ki** hívott **meg** **kit** tegnap a moziba ? (Lipták 2002 : (12b))
 c. PÉTER hívta **meg** tegnap a moziba MARIT (Lipták 2002 : (12c))
 Peter-NOM VM invite-PAST-3SG yesterday the cinema-ILL Mary-ACC
 'PETER invited MARY yesterday to the cinema (, not the other way around/ not JOHN invited BEA.)'
- それに対して、本稿の対象である (37c, d) のタイプの多重疑問文は、ペア例挙 (Pair-Listing) をその返答として要求する (註13を参照されたい)。
- 13) (47a) と (47a') の embd. CP 内における Wh 要素の相対語順の相違は、意味解釈上の相違を生み出す。以下の (ia-b) の用例から判明するように、より左方に生起する Wh 要素 (欠陥 [wh] 要素) に対応する要素が Spec (Top) 位置に生起し、純正 [wh] 要素に対応する要素が Spec (F) に生起するペア例挙 (Pair-List) の返答 (ib) が期待される。

- (i) a. János **kit** **kinek** mutatott **be**? (É. Kiss 2002 : p.101, (69a))
 John-NOM who-ACC who-DAT introduce-PAST-3SG VM
 'Whom did John introduce to whom?'
- b. Péter MARINAK ÉS ÉVÉNAK, Zoltán ÉVÁNAK ÉS JÚLIÁNAK, István
 Peter-ACC Mary-DAT abd Eve-DAT, Zoltan-ACC Eve-DAT and Julie-DAT, Stephen-ACC
 pedig JÚLIÁNAK ÉS MARINAK mutatta **be**.
 on the other hand Julie-DAT and Mary-DAT
 'He introduced Peter to Mary and Eve, Zoltan to Eve and Julie, and Stephen to Julie
 and Mary'

Kiss (p.c.) によれば、(47d) が適格となるのは DP (*János*) に対して Contrastive Topic が適用された派生である（この場合、*János* の直後に Pause が生起する）。Horváth (p.c.) の判断は、Kiss (p.c.) の判断に類似する。Horváth (p.c.) は、(47d) が可能であると考える（加えて、この用法が Metalinguistic Type of Use であると付け加える）。Contrastive Topic の適用を受けた要素は Spec (Top) へ移動する（詳細は、É. Kiss (2002 : pp.22-25, 122-124) を参照されたい）。

- 14) 特異要素に関する想定された仮説が仮説が妥当する場合、以下の予測が可能となる（未検証）。
- (i) a. **Ki** láttá Pétert **RIKTÁN?**
 who-NOM see-PAST-3SG Peter-ACC seldom
 'Who seldom saw Peter?'
- b. ***RIKTÁN** láttá Pétert **ki?**
- 特異要素が関与する (50) と (51) の用例では、単一の要素（特異要素、[focus] 要素、あるいは Wh 要素）が Spec (F) に生起する (É. Kiss 2002 : p.91)。本稿の註 (6) で述べたように、F に例えば素性 [*wh*] が付与された状況で 3 つの Wh 要素が生起する派生に対する DBS の適用は、F のより上位の先端部にある 2 つの欠陥 [wh] 要素の連続と、F の最下位の先端部に 1 つの純正 Wh 要素が生起する構造を生成する。つまり、DBS が適用された構造において、欠陥 Wh 要素（あるいは欠陥 [focus]）要素の中で最上位の要素がその移動先で発音されることがある（他の要素が元位置で発音されることになる）。
- 15) 長距離移動する主語 Wh 要素 (*ki* 'who') に対格 (Accusative) が付与されるプロセスについては、É. Kiss (2002 : pp. 255-256) を参照されたい。指示的付加語 Wh 要素 (*mikor* 'when', *hol* 'where') が「特定」と指定される場合、当該付加語 Wh 要素の Wh 島内部から移動が適格と予測されることになる。
- 16) 本稿の匿名レフリーが指摘するように、付加語 Wh 要素と対格要素 (*mit* 'what') が欠陥 [wh] 要素として機能し、主語 Wh 要素 (*ki* 'who') が純正 [wh] 要素として機能する (52) のタイプ、つまり [*mit* ... *hogy hogyan+ki*] の語順が適格と予測されることになる（未検証）。
- 17) この論法が妥当する場合、以下の予測が可能となる（未検証）。

- (i) *János **ATTILÁNAK**i kérdezte [hogy Péter **mit**] mondott [hogy Mari küldött [ti tj]]]
 John-NOM Attila-DAT asked-PAST-3SG that Peter-NOM say-PAST-3SG hat Mary-NOM
 send-PAST-3SG

本稿の仮説群は、Lipták (2002) が提示する「普遍数量詞 (Universal Quantifier) + [focus] 要素」の連続と、「普遍数量詞 (Universal Quantifier) + Wh 要素」の連続との相違を説明できない。Lipták (2002) と É. Kiss (1993, 2002 等) では、ペア例挙 (Pair-Listing) の返答を

要求する例えは (iic, d) では, 左方の Wh 要素が普遍数量詞として機能すると考える (この左方の Wh 要素の移動先として, F の直接上位の位置に Dist (ributive) の投射を想定する)。[普遍数量詞 (Universal Quantifier) + Wh 要素] の連続が排除されるプロセスが判然としない。同時に, 普遍数量詞として機能すると想定される Wh要素 (ki 'who') が生起する (iic) と普遍数量詞そのもの (mindenki 'everybody') が生起する (iie) との相違を説明するプロセスもまた, 判然としない (これらの問題に関しては, 稿を改めて検討する)。

- (ii) a. Mindig PÉTERT hívta meg (Lipták 2002 : (7a))
always Peter-ACC invite-PAST-1SG VM
'At all times, I invites PETER'
- b. (*Mindig) kit hívál meg? (Lipták 2002 : (7b))
always who-ACC invite-PAST-2SG VM
'Who did you always invite?'
- c. Ki [melyik ajándékot] választotta? (É. Kiss 2002 : p.101, (66a))
who-NOM [which present]-ACC choose-PAST-3SG
'Who chose which present?'
- d. [Melyik ajándékot] ki választotta? (É. Kiss 2002 : p.101, (66b))
- e. *Mindeni [melyik ajándékot] választotta? (É. Kiss 2002 : p.102, (70))
everybody-NOM [which present]-ACC choose-PAST-3SG
'Which present did everybody choose?'

参考文献

- Adger, David (2003) *Core Syntax: A Minimalist Approach*, Oxford University Press, New York.
- Barss, Andrew (2000) "Minimalism and Asymmetric Wh-Interpretation," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Billings, Loren, and Catherine Rudin (1996) "Optionality and Superiority: A new Approach to Overt Multiple Wh-ordering," *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The College Park Meeting, 1994*, ed. by Jindřich Toman, Michigan Slavic Publications, Ann Arbor, Michigan.
- Bošković, Željko (1997) "On Certain Violations of the Superiority Condition, AgrO, and Economy of Derivation," *Journal of Linguistics* 33, 227-254.
- Bošković, Željko (1998) "Multiple Wh-Fronting and Economy of Derivation," *Proceedings of WCCFL 16*, ed. by Emily Curtiss, James Lyle, and Gabriel Webster, 49-63, CSLI Publications, Stanford, Calif.
- Bošković, Željko (1999) "On Multiple Feature Checking: Multiple Wh-Fronting and Multiple Head Movement," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 159-188, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko (2000) "Sometimes in [Spec, CP], Sometimes in Situ," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 53-88, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko (2002) "On Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 33, 351-383.
- Bródy, Michael (1990) "Some Remarks on the Focus Field in Hungarian," *UCL Working Papers in Linguistics* 2, 201-225.
- Bródy, Michael (1995a) "Focus and Checking Theory," *Levels and Structure (Approaches to Hungarian)* vol. 5, JATE, Szeged), ed. by István Kenesei, 29-41.
- Bródy, Michael (1995b) *Lexico-Logical Form, A Radically Minimalist Theory*. MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, Noam (1980) "On Binding," *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivations by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, MIT Press, Cambridge, MA.
- Contreras, Heles (1992) "On Resumptive Pronouns," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- É. Kiss, Katalin (1981a) "Structural Relations in Hungarian, A Free Word Order Language," *Linguistic Inquiry* 12/2, 185-213.
- É. Kiss, Katalin (1981b) "Topic and Focus, the Operator of the Hungarian Sentence," *Folia Linguistica* 15, 305-330.
- É. Kiss, Katalin (1986) "The Order and Scope of Operators in the Hungarian Sentence," *Topic, Focus, and Configurationality*, ed. by Werner Abraham, and Sjaak de Meij, John Benjamins, Amsterdam.
- É. Kiss, Katalin (1987) *Configurationality in Hungarian*. Reidel, Dordrecht.
- É. Kiss, Katalin (1991) "Logical Structure in Syntactic Structure: The Case of Hungarian," *Logical Structure and Syntactic Structure*, ed. by James Huang and Robert May, Reidel, Dordrecht.
- É. Kiss, Katalin (1993) "Wh-Movement and Specificity," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 85-120.
- É. Kiss, Katalin (1994) "Sentence Structure and Word Order," *The Syntactic Structure of Hungarian (Syntax and Semantics* vol. 27, 1-90), ed. by Ferenc Kiefer, and Katalin É. Kiss, Academic Press, San Diego.
- É. Kiss, Katalin (1995) "NP Movement, Operator Movement, and Scrambling in Hungarian," *Discourse Configurational Languages*, ed. by Katalin É. Kiss, Oxford University Press, New York/London.
- É. Kiss, Katalin (1998) "Identificational Focus versus Information Focus," *Language* 74, 245-273.
- É. Kiss, Katalin (2002) *The Syntax of Hungarian*, Oxford University Press, New York/London.
- Farkas, Donka F. (1986) "On the Syntactic Position of Focus in Hungarian," *Natural Language and Linguistic Theory* 4, 77-96.
- Freidin, Robert (1992) *Foundations of Generative Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Freidin, Robert (1995) "Superiority, Subjacency, and Economy," *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, ed. by Héctor Campos, and Paula Kempchinsky, 138-167, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Freidin, Robert, and Howard Lasnik (1981) "Disjoint Reference and Wh-Trace," *Linguistic Inquiry* 12, 39-53.
- Grewendorf, Günter (2001) "Multiple Wh-Fronting," *Linguistic Inquiry* 32, 87-122.
- Heck, Fabian and Gereon Müller (2000) "Successive Cyclicity, Long-Distance Superiority, and Local Optimization," *Proceedings of WCCFL* 19.
- Hornstein, Norbert (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism*, Blackwell, Oxford.
- Horváth, Júlia (1986) *FOCUS in the Theory of Grammar and the Syntax of Hungarian*, Foris, Dordrecht.
- Ishii, Toru (2000) "The Minimal Link Condition and the Theory of Movement," *English Linguistics* 17, 305-329.
- Ishioka, Seizo (1996) "Notes on Focalization in Hungarian," *Linguistic Society of West Japan NIDABA* 25, 177-186.
- Jaeggli, Oswaldo (1982) *Topics in Romance Syntax*, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswaldo (1988) "ECP Effects at LF in Spanish," *Advances in Romance Linguistics*, ed. by David Birdsong and Jean-Pierre Montreuil, Foris, Dordrecht.
- Jaeggli, Oswaldo (1991) "Head Government in LF-Representations," *Logical Structure and Linguistic Structure: Cross-Linguistic Perspectives*, ed. by C. T.-. James Huang and Robert May, 79-109,

- Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Kálmán, L., G. Prószky, Á. Nádasdy, and C. Kálmán (1986) "Hocus, Focus, and Verb Types in Hungarian Infinitive Constructions," *Topic, Focus, and Configurationality*, ed. by Werner Abraham, and Sjaak de Meij, John Benjamins, Amsterdam.
- Kayne, Richard (1983) "Connectedness," *Linguistic Inquiry* 14, 223-249.
- Kenesei, István (1986) "On the Logic of Word Order in Hungarian," *Topic, Focus, and Configurationality*, ed. by Werner Abraham, and Sjaak de Meij, John Benjamins, Amsterdam.
- Kenesei, István (1998) "Adjuncts and Arguments in VP-Focus in Hungarian," *Acta Linguistica Hungarica* 45.
- Kenesei, István, Róbert M. Vago and Anna Fenyvesi (1998) *Hungarian (Descriptive Grammars)*, Routledge, London/New York.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*, The University of Chicago Press, Chicago and London.
- Lasnik, Howard (1999) *Minimalist Analysis*, Blackwell, Oxford.
- Lipták, Anikó (2002) "On the Syntax of Wh-Items in Hungarian," Reviewed by Genovéva Puskás, *Glot International* 6 (9/10), 293-301.
- Müller, Gereon (2001) "Order Preservation, Parallel Movement, and the Emergence of the Unmarked," *Optimality-Theoretic Syntax*, ed. by Géraldine Legendre, Jane Grimshaw, and Sten Vikner, 279-313, MIT Press, Cambridge, MA.
- Müller, Gereon (2004) "Phrase Impenetrability and Wh-Intervention," *Minimality Effects in Syntax*, ed. by Arthur Stepanov, Gisbert Fanselow, and Ralf Vogel, Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Pesetsky, David, (1982) *Paths and Categories*, Doctoral dissertation, MIT.
- Pesetsky, David, (1987) "Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding," *The Representation of (In) definiteness*, ed. by Eric J. Reuland and Alice G. B. ter Meulen, 98-129, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David, (2000) *Phrasal Movement and Its Kin*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Piñón, Christopher (1991) "Presuppositions and the Syntax of Negation in Hungarian," *CLS* 27, 246-262.
- Piñón, Christopher (1993) "SigmaP and Hungarian," *WCCFL* 11, 388-404.
- Puskás, Genovéva (1992) "The Wh-Criterion in Hungarian," *Rivista di Grammatica Generativa* 17, 141-186.
- Puskás, Genovéva (1997) "Focus and the CP Domain," *The New Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, Longman, London/New York.
- Puskás, Genovéva (2000) *Word Order in Hungarian: The Syntax of A'-Positions*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Richards, Norvin (1996) "Subjacency Forever," ms. MIT.
- Richards, Norvin (1997) *What Moves Where in Which Language?*, Doctoral dissertation, MIT.
- Richards, Norvin (1998) "The Principle of Minimal Compliance," *Linguistic Inquiry* 29, 599-629.
- Richards, Norvin (1999) "Featural Cyclicity and the Ordering of Multiple Specifiers," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 127-158, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rudin, Catherine (1986) *Aspects of Bulgarian Syntax: Complementizers and Wh Constructions*, Slavica, Columbus.
- Rudin, Catherine (1988) "On Multiple Questions and Multiple WH Fronting," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 445-502.
- Sabel, Joachim (1995) *Restrukturierung und Lokalität (Studia Grammatica 42)*, Akademie Verlag, Berlin.
- Sabel, Joachim (2002) "A Minimalist Analysis of Syntactic Islands," *The Linguistic Review* 19, 271-315.
- Suñer, Margarita (1992) "Indirect Questions and the Structure of CP: Some Consequences," *Current Studies in Spanish Linguistics*, ed. by Héctor Campos and Fernando Martínez-Gil, Georgetown

- University Press, Washington, D.C.
- Suñer, Margarita (1995) "Negative Elements, Island Effects and Resumptive no," *The Linguistic Review* 12, 233-273.
- Szabolcsi, Anna (1981) "The Semantics of Topic-Focus Articulation," *Formal Methods in the Study of Language*, ed. by Groendendijk et al., Mathematisch Centrum, Amsterdam.
- Szabolcsi, Anna (1983) "Focussing Properties, or the Trap of First Order," *Theoretical Linguistics* 10, 125-145.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects," *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Uriagereka, Juan (1999) "Multiple Spell-Out," *Working Minimalism*, ed. by Samuel David Epstein and Norbert Hornstein, 251-282, MIT Press, Cambridge, MA.
- Wunderlich, Dieter (2002) "On the Nature of Dative in Hungarian," *Approaches to Hungarian 8*, ed. by István Kenesei and Péter Siptár, Akadémiai Kaidó, Budapest.
- 石岡精三 (2005) 「Wh 島制約の緩和プロセス」, 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』第19号, 135-170.